

KANA

TAKE

金 武 古 墳 群

金武古墳群吉武G群の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第579集

1 9 9 8

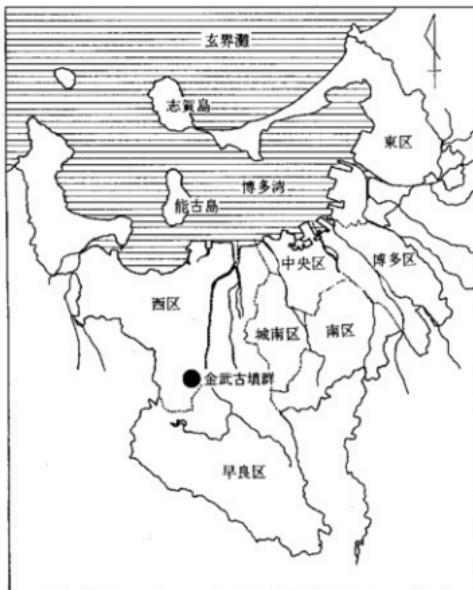
福岡市教育委員会

KANA TAKE

金武古墳群

金武古墳群吉武G群の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第579集



KYK-G

調査番号9635

1998

福岡市教育委員会

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、彼地との人、物、文化の交流が先史時代より絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物が地中に残され、調査が進むなか明らかにされてきました。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は早良平野の奥に位置した6世紀後半以降の群集墳を対象としたものでした。周辺には多くの群集墳とともに、製鉄関連遺構、遺物も見つかっています。対象となった4基の古墳は極めて遺存が良好で石室も破壊されずに残り、貴重な資料を得ることができました。特に、出土した新羅土器は端的に韓半島の人々との交流を示すものです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に調査に際し御協力いただいた関係者各位の皆さんに厚くお礼申し上げます。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例 言

1. 本書は福岡市西区大字吉武字七郎谷765番-12外において福岡市教育委員会が1995年度に実施した調査報告書である。
2. 調査は荒牧が担当し、遺構図面類等の資料作成にあたっては担当者のほか、黒田和生、名取さつきが行った。
3. 遺物整理は主に品川伊津子、安川三千代が行い、実測、浄書は荒牧のほか平川敬治、井上加代子が行った。
4. 本文は荒牧が執筆した。
5. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

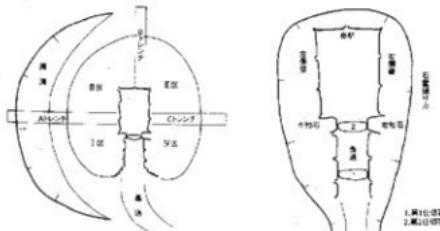
凡 例

1. 本書掲載の遺構図方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 40'$ 西偏する。
2. 遺物実測図の番号は土器を通し番号としたほかは図版別に1より番号を付した。
3. 土器実測図の断面黒塗りは須恵器を示し、白ヌキは土師器ないしそれに近い還元化していない焼成のものを示す。
4. 調整は以下に示す通り

— — — — — ヘラケズリ

— - - - - ヨコナヂ

5. 古墳の各部名称は以下に示す通りである。



調査名	金武古墳群吉武G群第1次	開発面積	9753m ²
遺跡略号	KYK-G	調査面積	1543m ²
調査番号	9635	調査期間	96.08.20~97.02.01
調査地番籍	西区大字吉武字七郎谷765番12外		

本文目次

Iはじめに	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	1
II位置と環境	
1 立地	1
2 歴史的環境	1
3 金武古墳群	1
III調査の記録	
1号墳	3
2号墳	11
3号墳	18
4号墳	28
007(SX)	38
006(SK)	38
その他の遺物	38
IVまとめ	

挿図一覧

- Fig. 1 金武古墳群の位置
Fig. 2 金武古墳群吉武G群現況地形図
Fig. 3 金武古墳群吉武G群墳丘測量図
Fig. 4 1号墳地山成形図 (1/200)
Fig. 5 1号墳墳丘土層断面図 (1/60)
Fig. 6 1号墳外護列石実測図 (1/80)
Fig. 7 1号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 8 1号墳閉塞石実測図 (1/60)
Fig. 9 1号墳出土鉄器実測図 (1/2)
Fig. 10 1号墳出土遺物実測図1 (1/4)
Fig. 11 1号墳出土遺物実測図2 (1/6)
Fig. 12 2号墳地山成形図 (1/200)
Fig. 13 2号墳墳丘土層断面図 (1/60)
Fig. 14 2号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 15 2号墳外護列石実測図 (1/80)
Fig. 16 2号墳閉塞石実測図 (1/60)
Fig. 17 2号墳出土玉類、鉄器実測図 (1/2)
Fig. 18 2号墳出土土器実測図1 (1/4)
Fig. 19 2号墳出土土器実測図2 (1/6)
Fig. 20 2号墳出土土器実測図3 (1/6)
Fig. 21 3号墳地山成形図 (1/200)
Fig. 22 3号墳墳丘土層断面図 (1/60)
Fig. 23 3号墳外護列石実測図 (1/80)
Fig. 24 3号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 25 3号墳閉塞石実測図 (1/60)
Fig. 26 3号墳出土玉類、鉄器実測図 (1/1, 1/2)
Fig. 27 3号墳出土土器実測図1 (1/4)
Fig. 28 3号墳出土土器実測図2 (1/4)
Fig. 29 3号墳出土土器実測図3 (1/4)

- Fig. 30 3号墳出土土器実測図4 (1/6)
Fig. 31 4号墳地山成形図 (1/200)
Fig. 32 4号墳墳丘土層断面図 (1/60)
Fig. 33 4号墳外護列石実測図 (1/80)
Fig. 34 4号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 35 4号墳出土玉類、耳環、鉄器実測図 (1/2)
Fig. 36 4号墳出土土器実測図1 (1/4)
Fig. 37 4号墳出土土器実測図2 (1/4)
Fig. 38 4号墳出土土器実測図3 (1/6)
Fig. 39 4号墳出土土器実測図4 (1/6)
Fig. 40 4号墳出土土器実測図5 (須恵器1/6)
Fig. 41 007 (SX) 実測図 (1/20)
Fig. 42 007 (SX) 出土遺物実測図 (1/4)
Fig. 43 006 (SK) 実測図 (1/40)
Fig. 44 1号墳旧表土下出土遺物実測図 (1/3)

写真図版

- P L. 1 1 4号墳出土新羅土器
 2 4号墳出土坏付瓶
P L. 2 1 金武古墳群吉武G群調査区全景(南から)
 2 金武古墳群吉武G群調査区全景(上から)
P L. 3 1 1号墳墳丘遺存状況
 2 1号墳墳丘除去後石室、外護列石露呈
 3 1号墳玄室奥壁
 4 1号墳玄室前壁(冠石)
 5 1号墳閉塞石
 6 1号墳玄室前壁(袖部)
P L. 4 1 2号墳墳丘遺存状況
 2 2号墳墳丘除去後石室、外護列石露呈

- | | | | |
|---------------------|--------------------|-----------|------------------|
| P L.4 | 3 2号墳閉塞石 | P L.5 | 1 4号墳墳丘遺存状況（南から） |
| 4 2号墳玄室（後室）奥壁 | 2 4号墳墳丘遺存状況（東から） | | |
| 5 2号墳玄室（後室）前壁 | 3 4号墳墳丘除去後石室外護列石露呈 | | |
| 6 2号墳前庭部遺物出土状況 | 4 4号墳玄室奥壁 | | |
| P L.5 | 1 3号墳墳丘遺存状況 | 5 4号墳玄室前壁 | |
| 2 3号墳墳丘除去後石室、外護列石露呈 | 6 4号墳墓道（前庭部）遺物出土状況 | | |
| 3 3号墳玄室奥壁 | | | |
| 4 3号墳玄室前壁 | | | |
| 5 3号墳閉塞石、墓道遺物出土状況 | | | |
| 6 3号墳Aトレンチ土層断面 | | | |



□ 製鉄遺跡

- 1 草場古墳群
- 2 高崎古墳群
- 3 草刈古墳群
- 4 広石古墳群
- 5 コノリ古墳群
- 6 野方古墳群
- 7 野方動進古墳群
- 8 羽根戸古墳群
- 9 羽根戸南古墳群
- 10 鮫盛古墳群
- 11 金武古墳群
- 12 西山古墳群
- 13 黒塚古墳群
- 14 黒塔古墳群
- 15 白塔古墳群
- 16 長峰古墳群
- 17 兼平古墳群
- 18 三郎丸古墳群
- 19 妻留古墳群
- 20 山崎古墳群
- 21 西油山古墳群
- 22 震ヶ淵古墳群
- 23 彩塚古墳群
- 24 鮫ヶ原古墳群
- 25 大谷古墳群
- 26 七隈古墳群
- 27 食瀬戸古墳群
- 28 千代古墳群
- 29 鮫倉古墳群
- 30 原古墳群
- 31 有田古墳群
- 32 五島山古墳群
- 33 震雲寺古墳
- 34 小戸古墳
- 35 下山門製鉄遺跡
- 36 城ノ口製鉄遺跡
- 37 斜ヶ瀧製鉄遺跡
- 38 コノリ製鉄A遺跡
- 39 コノリ製鉄B遺跡
- 40 コノリ製鉄C遺跡
- 41 コノリ製鉄D遺跡
- 42 羽根戸笠置製鉄遺跡
- 43 丸熊製鉄遺跡
- 44 鶴来里製鉄遺跡
- 45 仙道製鉄A遺跡
- 46 山崎製鉄遺跡
- 47 五ヶ村池製鉄遺跡
- A 梅林古墳
- B クエゾノ1号墳
- C 椿塚古墳
- D 桶塚

早良平野の古墳群(1/60,000)

I はじめに

1 調査に至る経過

1996年(平成8年)5月23日に澄男工業株式会社より資材置き場の用途で当地の山林を開発する旨の埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では踏査を行い、4基の古墳を確認するとともに調査の為の協議を重ね、1996年8月20日より調査を開始した。

2 調査の経過

調査前は周溝が流土により埋没していたが、墳丘の遺存は極めて良好で、石室はすべて盗掘を受けているがほぼ完存していた。検出した遺構は4基の古墳と1基の焼土壙である。なお、遺構は検出されなかつたが、3号墳周辺より弥生中期の土器片、1号墳の旧表土下より縄文土器が出士した。調査は約5ヶ月を要し、1997年2月1日に終了した。

3 調査の組織

調査は以下の組織体制で臨んだ。

(調査主体) 福岡市教育委員会 (調査総括) 埋蔵文化財課長 荒牧輝勝 第1係長 横山邦継
(事前審査) 文化財主事 松村道博 係員 池田祐司 (庶務) 西田結香 (担当) 荒牧宏行

II 位置と環境

1 立地

扇状地からなる早良平野を取り巻く丘陵には約700基の後期群集墳が確認されている。金武古墳群はその奥まった丘陵部に位置し、145基から構成されている。本調査区は標高84~96mの丘陵斜面に位置する。最下の1号墳以東から急落した谷になり、沢が流下する。現況は山林である。

2 歴史的環境

扇状地の早良平野を可耕地とし、中央を流下する室見川左岸においては南は西山(430m)から北は長垂山から派生する丘陵に6世紀代の後期群集墳が多数形成されている。特に中城の別根戸古墳群一帯では群集が著しい。この地域では帆立貝式の橋渡古墳(全長約40m)が存在するが、現在まで前方後円墳がみられない。しかし、調査の進行とともに発見される可能性は存する。それに対し、右岸では5世紀代の坪塚古墳(全長75m)、梅林古墳(全長27m)、クエゾノ古墳(全長22~25m程度)が検出されている。しかし、6世紀代に至る前方後円墳は発見されていない。

遺物からは海岸部砂丘地帯の西新町遺跡から内陸部の有田遺跡、吉武遺跡、先述のクエゾノ1号墳等に陶質土器が出土し、早良平野の奥まった金武古墳群吉武L群、三郎丸古墳、さらに本報告の4号墳からは新羅土器が出土し、渡来人を伺わせる韓半島との強い結びつきが考えられる。

上述の遺構、遺物の他、当地域では製鉄関連に注目が集まる。後期群集墳が立地する丘陵部には鉄滓が多く出土し、古墳炭道部を主にこれを供献したものが多くみられる。金武、内野の奥まった内陸部に平安時代を中心とした製鉄炉が検出されているが、古墳時代においても西部の今宿地域とともに製鉄関連施設が多く存在していたものと思われる。6世紀前後の築造と考えられるクエゾノ5号墳には鍛冶道具が副葬されていた。

3 金武古墳群

既往の調査から吉武L群の6世紀前半代から築造を開始している。首長墓として、平野部に突出した吉武L群、乙石H群が想定される。乙石H群1、2号墳は7世紀初頭の築造が考えられる、巨石を用いた石室を有した径20~30mの円墳である。吉武K7号墳は装飾古墳である。

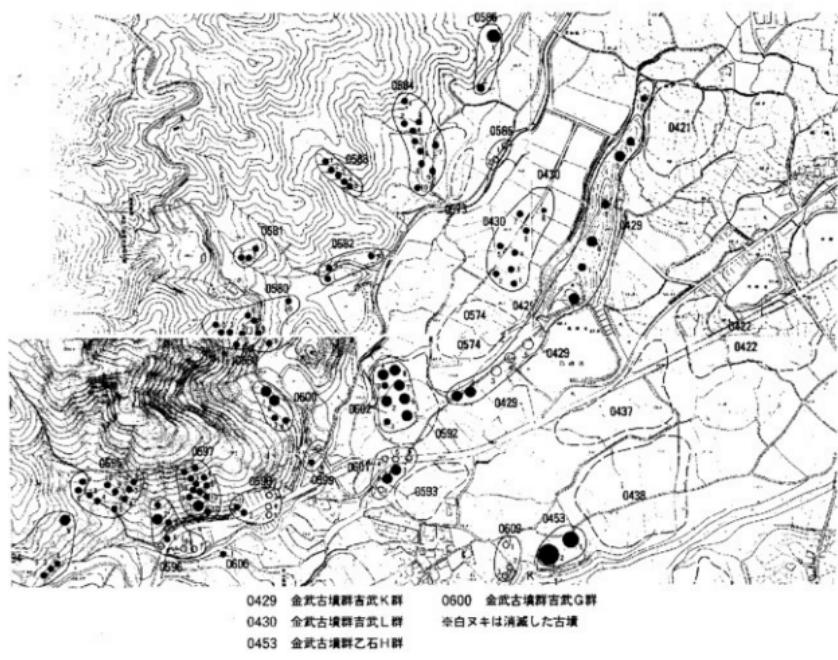


Fig.2-1 金武古墳群分布圖 (1/8000)

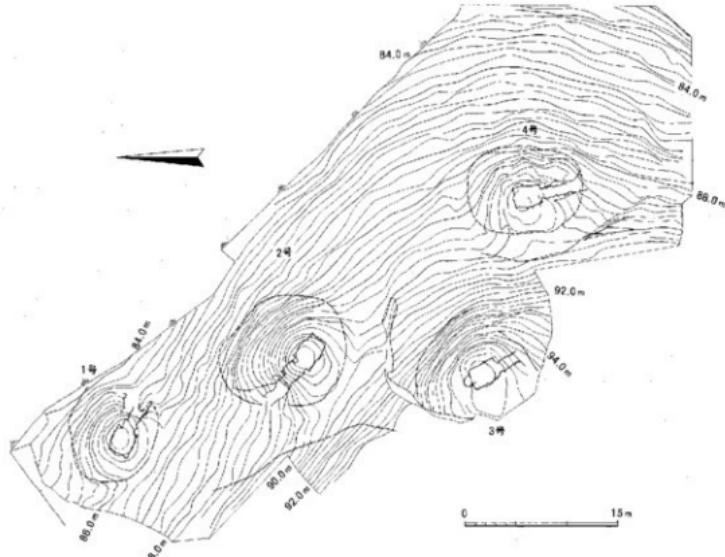


Fig.2-2 金武古墳群吉武G群現況地形図(1/500)



Fig. 3 金武古墳群吉武G群墳丘測量図(1/200)

1号墳

(1) 位置と現状

本調査区G群中の最北端に位置する。レベルからは4基中もっとも低い丘陵斜面に占地する。勾配は緩やかになり、地形変換点に位置するためか、周辺の地山には多くの転石が露頭し、谷筋近くの本墳西側は人頭大の礫を含む砂礫が地山になっている。

現状では丘陵側のI、II区の地山成形による周溝は認められるものの、大部分が造成工事によって流出した土砂によって埋まっていた。石室は築造部からの開口が認められるのみで、盗掘坑は無い。天井石が露呈していたが、遺存は良好であった。

(2) 墳丘

石室主軸方向の径10.0m、直交した中心径9.3mの円墳をなし、墳丘基底面から天井石下底までの高さ1.5m(Aトレンチ)~2.5m(Cトレンチ)までの盛上が残存する。

地山成形

丘陵側の南西部を大きく削りだし墳丘基底面、周溝を形成している。周溝は、I、II区とIII区の一部において周溝外側の崩方を馬蹄形状に見出すことができる。周溝の石室側の立ち上がりは緩やかに墳丘基底面へ移行する。墳丘基底面は谷側(北東側)に下降し、そのテラスは丘陵側のI、II区では狭い。Aトレンチの観察では石室中心から4.1mまでに平坦面が認められるが、墳端は地山成形による周溝内にまで及ぶ。

なお、谷側に位置したIII、IV区の旧表土下の縋まりがない黄褐色土中から縄文土器片、石器が出土した。

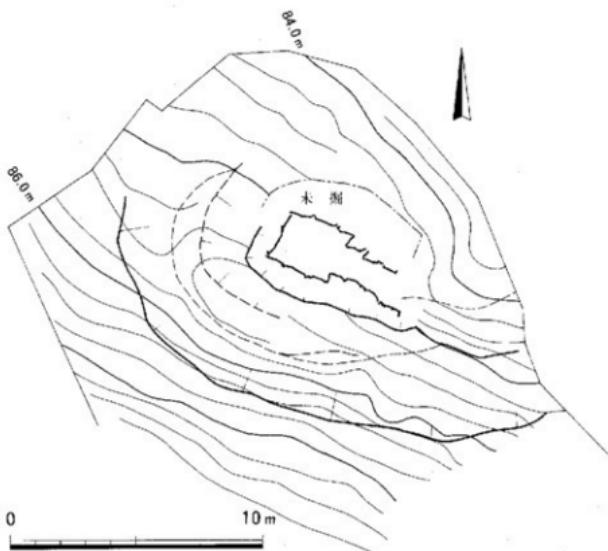


Fig.4 1号墳地山成形図(1/200)

盛土

I 区を除く基底面に旧表土を残し盛土されている。概ね黄褐色系の砂質土が用いられ、石室側は硬質に締められている。I、II区は地山成形による周溝の立ち上がり近くに列石を配して土留がなされているが、最終的には墳端が列石外側の周溝内に及んで盛土を施し、整形している。墳端はAトレンチで石室中心より4.3m、Bトレンチで4.4m、Cトレンチで5.0mの位置に確認された。

外護列石

I 区から II 区の一部にかけて地山成形による周溝の立ち上がり近くに列石が配されている。40cm 大の石材を用いて一段が築かれている。この範囲は上記のように墳端が周溝内に囲られ、列石は盛土によって被覆される。III区では羨道から大きく開いた前部の壁面に 10~20cm 大の小石を貼り付けたように積み上げているが、崩落が著しい。さらに IV 区墳端にかけて表土中に崩落した石材が検出されたが上部の列石が崩落したものか墳端を巡らしたものか判断が難しい。IV 区の墳丘中位に直線的に配列された石が検出され、III区へ延長していく。III区では鈍角に折れ曲がって墳端の方へ巡り、石材は大振りのものに変わり、墳丘基底面上に置かれている。III、IV 区の列石より内側(石室側)の盛土中にも石材が多く混入するが、配列は見られない。

(3) 埋葬施設

主軸方位を S-67°-E にとり南東側に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。

石室掘方

石室掘り方と玄室奥壁の腰石との隙間は他の壁体と比べ狭く、先に固定させたものと思われる。石室掘り方の北半分(III、IV区)は崩壊の危険から未検出である。玄室から羨道にかけての石室内の基底面には壁体に沿った腰石固定の為の溝状の掘削と根固め石が検出された。

玄室

奥幅 197cm、前幅 207cm、右側壁長 255cm、左側壁長 246cm を測り、右側壁側が奥壁、袖石ともに、羨道側にずれた歪な長方形プランをなす。床面から天井までの高さは 246cm を測る。奥壁は腰石に 2 石の巨石を垂直に立て、その上部に小振りの石を持ち送る。右側壁は腰石に高さの異なる 3 石を配し、中央部の 3 段目の高さまではほぼ垂直に積み、上部にかけて持ち送る。目路は左側壁に比べ通らざる雰囲気とした感を受ける。左側壁は 3 石の腰石上に横長の長大な 1 石を積み、この石材より上部が持ち送られている。上部の中央はほぼ同大の石材が上積みされ、縦に目路が通った重箱積のようになる。前壁は 2 段の積石を施し、天井石との間に小石を充填する。冠石上の横長の 1 石は内側に突出して両側壁に架け渡されている。隅角は力石を用いて、穹窿形の持ち送りを保持する。

床面の敷石はほとんど無く、玄門の仕切石も検出されなかった。

羨道部

羨道部は閉塞石上まで 2 枚の天井石が残存し、左側壁長 3.2m、右側壁長 2.25m、基底面から天井まで 1.6m を測る。右側壁は主軸方向に平行して直線的に配されているが、袖石から連結した前面の腰石は袖石よりさらに内側に据えられている。腰石を安定させるための基底面の溝掘り方と袖石との間にかなり隙間を生じており、玄室右側壁の歪みから袖石の配置がずれた可能性がある。左側壁は仕切石が配置された位置まで袖石と腰石 1 石が主軸に平行し直線的に据えられるが、前面にかけては広がり、右側壁より長い。羨道の中間に閉塞石の最下に据えられた横長の 1 石を検出し、仕切石の可能性を考えた。

羨道部に連結した墓道の左側壁は地山を切り通して成形し、湾曲しながら東側谷部へ延びていく。

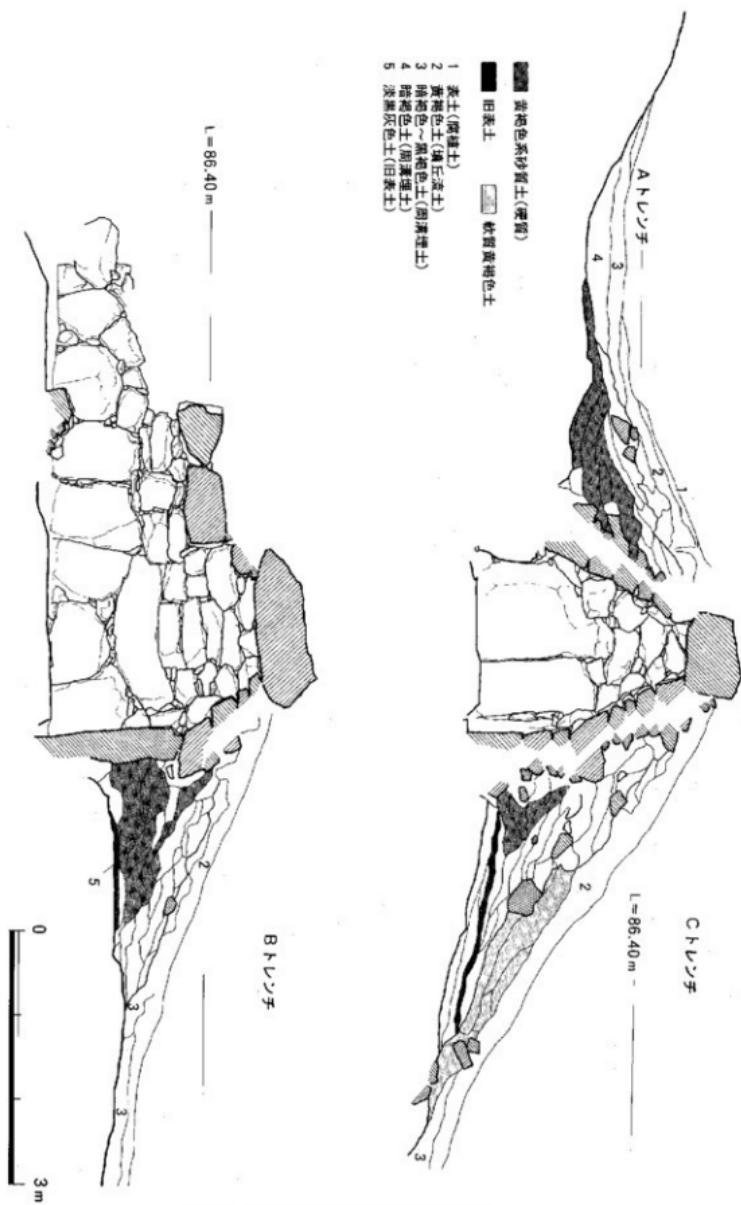


Fig.5 1号墳墳丘土層断面図 (1/60)

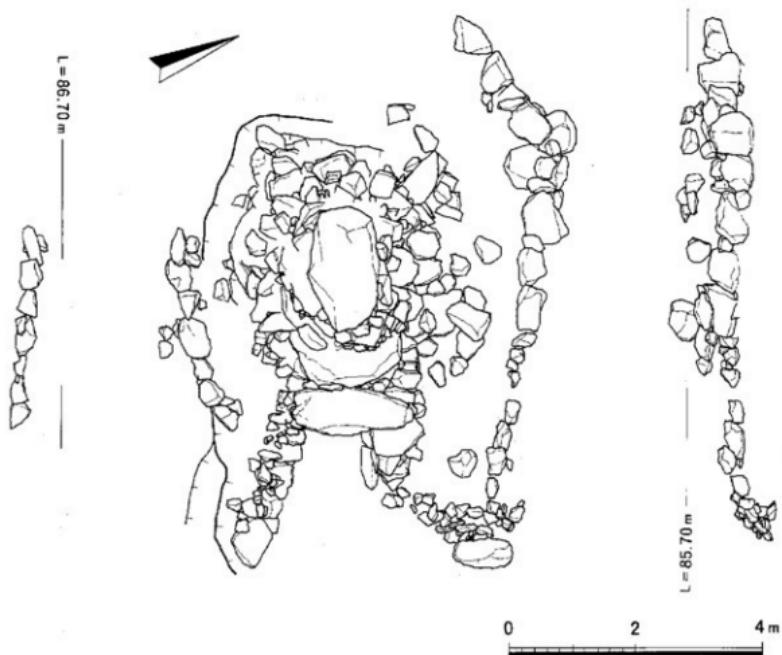


Fig.6 1号墳外護列石実測図 (1/80)

閉塞施設

右側壁袖石の前面から左羨道側壁の端まで小石を積む。前面の床面近くに10cm大の小砾を積み、中央部に40cmの大振りの転石を雜然と積み重ねている。最下に上積みされた石材と異なる横長の石材が羨道と直行して据えられ仕切石としたが、奥側の下部には小砾が嵌り込み積み換えられた閉塞石の一部にもみれる。

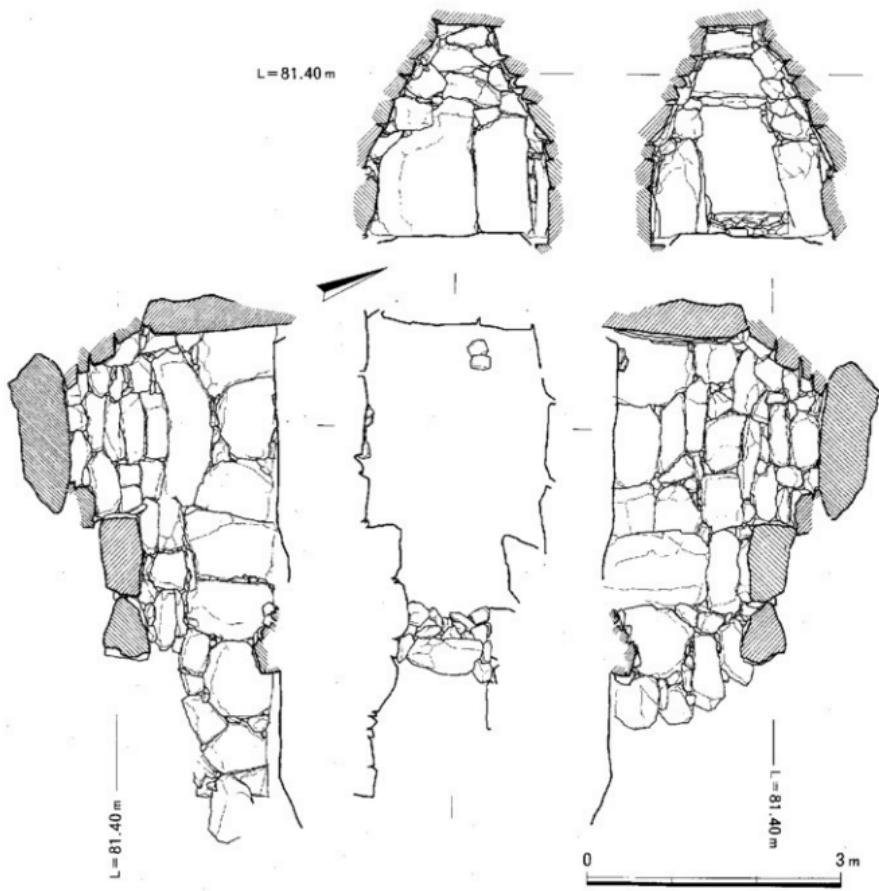


Fig. 7 1号填石室実測図 (1/60)

Fig. 7 1号填石室実測図 (1/60)

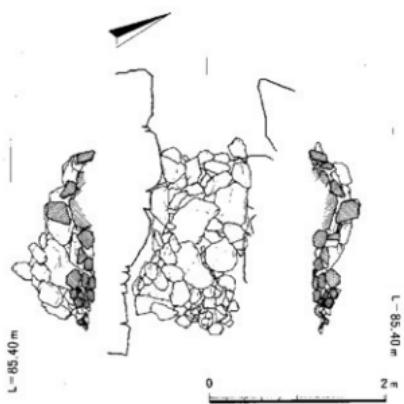


Fig. 8 1号墳閉塞石実測図 (1/60)

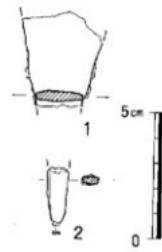


Fig. 9 1号墳出土鉄器実測図 (1/2)

(4) 出土遺物

鉄器

1、2ともに玄室内埋土からの出土である。1は広根斧箭式の鉄鐵であろう。2の茎には木質が付着している。

土器

墓道から4区羨道近くの墳端にかけて大半が出土し、図示した遺物は21を除きそこからの出土である。21は玄室内の仕切石近くからの出土である。壺は牛頭窯を中心とした編年によるとIV期～VI期に該当すると考えられる。1は口径12cmを測り、天井部がナデ調整され、平壺に近い。IV期であろう。8、9は黄褐色～橙色を呈した土師器の焼成である。8の振み中央部は窪む。18、19、20は土師器の高壺である。18は壺部内外面に赤色顔料が塗布されている。20の脚部と壺部の接合は壺部の外底中央に取付けた突起を脚部に差込む。21は玄室内の埋土から出土した。壺部と脚部に各2状の沈線が施されている。23の胴部外底には静止ヘラケズリが施されている。24は脚部の隙である。25は胴部上位にカキ目、下位に回転ヘラケズリを施し、頸部にヘラ記号を有す。27の壺は胴部上位に施されたカキ目中に浅い幅広の沈線が3程度、間隔を置いて巡る。28の横瓶は胴部外面に木目直行の平行タタキ、内面に同心円の当具痕が残る。側面には径9cmの円盤状の接合面と細線の回転ナデの痕跡が明瞭に見られる。29の胴部外面は強いカキ目が施され、平行タタキの痕跡が不明瞭になっている。内面は同心円の当具痕を残し、底部周辺はナデ消されている。30は頸部に3列の斜行刻みを施し、内面の同心円文はナデ消されている。31の内面には短い平行する文様の当具痕が見られる。32は頸部に沈線による2列の文様帯を構成した後、波状文を施す。胴部外面は平行タタキ、内面は上位に同心円文、中位最大径周辺に31と類似する短い平行文を残す。

鉄滓

羨道から墓道にかけて出土した。精練滓7点、鉄塊系遺物6点、含鉄滓1点が出土した。精練滓の最大のものは長さ6cm、鉄塊系遺物も6cmの小振りのものである。

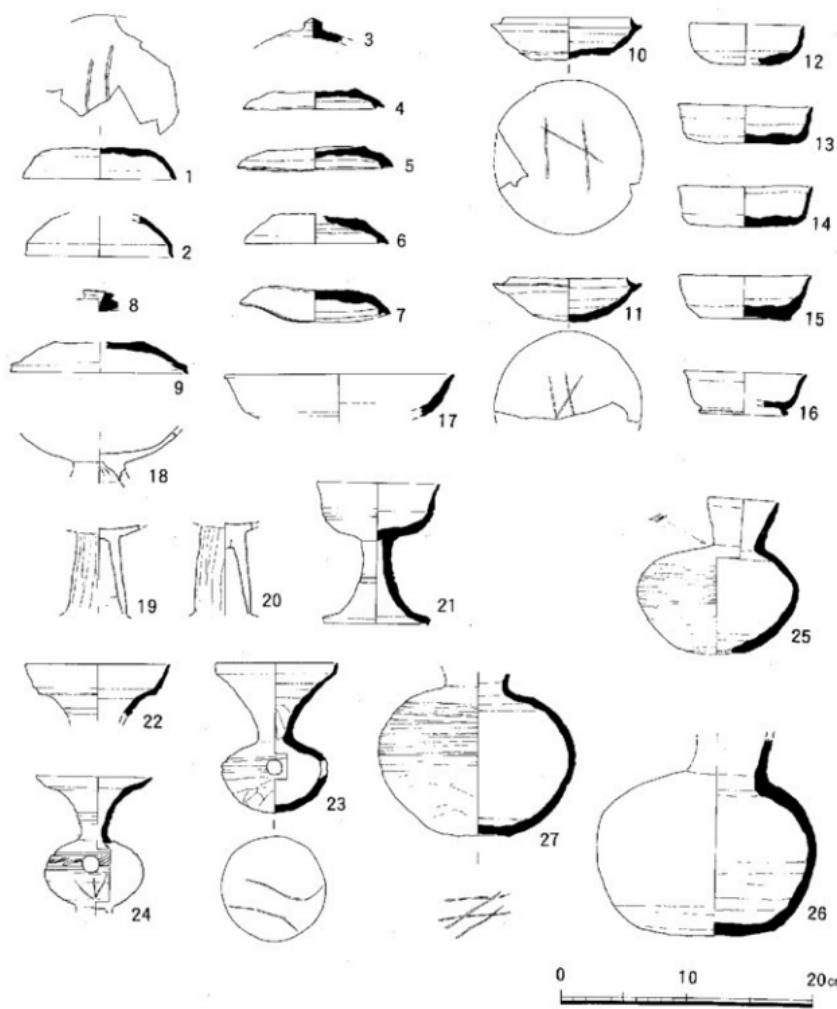


Fig.10 1号墳出土遺物実測図1 (1/4)

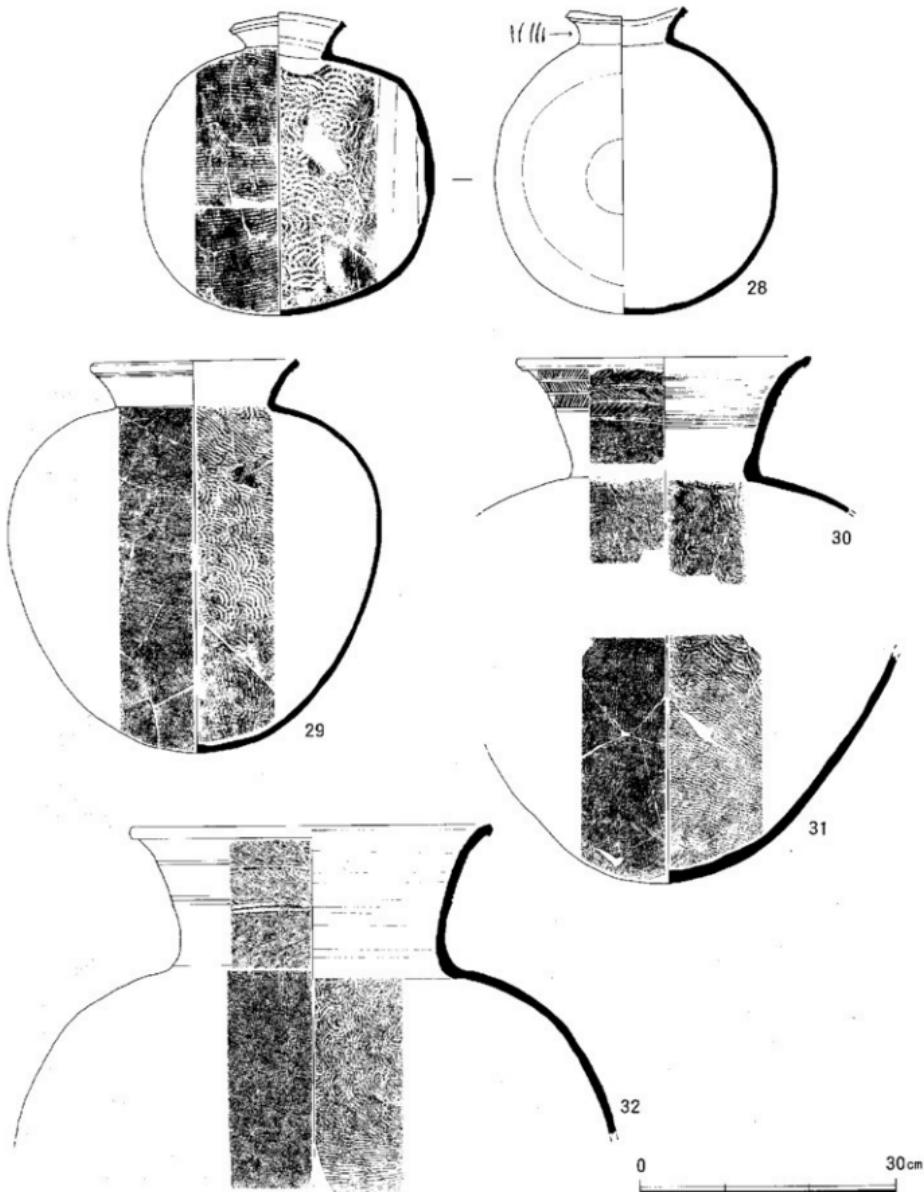


Fig.11 1号填出土遺物実測図2(1/6)

2号墳

(1) 位置と現状

1号と3号から等間隔を置いた中間の丘陵斜面に位置する。墳丘は天井石を被覆するまで残存し、石室は開口し、玄室内は荒らされていたがほぼ完存する。

(2) 墳丘

石室主軸方向の径13.0m、直交した中心径9.8mを測る前庭部が大きく開いた楕円プランを呈す。盛土は墳丘基底面から天井石を被覆した高さまで遺存し、谷側のAトレンチで観察された墳端から墳頂部までの比高差は4.7mを測る。

地山成形

南側の丘陵部を馬蹄形状に削り出し、周溝と墳丘基底面を整形する。墳丘規模からも地山整形による周溝は大きく、4基中最大である。

盛土

基底面に旧表土を残し盛上されている。墳丘基底面は傾斜が急であるために、I、II区では墳頂からの比高差が大きくなり、基底面が丘陵側のIII、IV区より広くとられている。従って、石室も墳丘の中心から丘陵寄りにずれた配置になる。

盛土は墳丘基底面の比高差を小さくするために谷側のI、II区では固く締めた明黄褐色～赤褐色の盛土と整地を行い、その後石室掘り方が掘削されている。

谷側の盛土はAトレンチの観察では石室近くに赤褐色と黄褐色の細かい互層が見られ、その上部に列石を据えながら黄褐色土を積み、更に赤褐色と黄褐色の混じた土で墳形を整える。

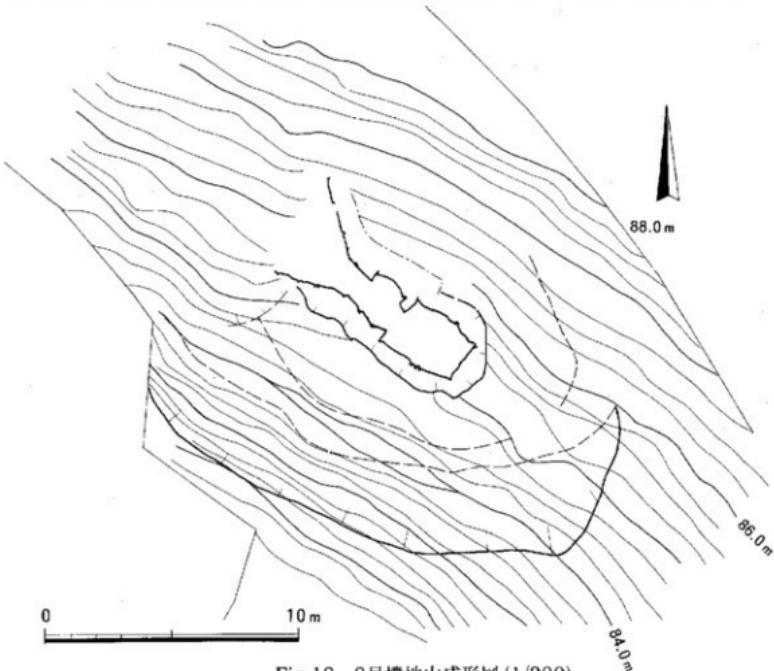


Fig.12 2号墳地山成形図 (1/200)

墳端はAトレンチで石室中心より5.3m、Bトレンチでは5.6m、Cトレンチでは4.5mの位置に確認された。

外護列石

谷側のI、II区では墳丘の土留め、保持を図った堅固な列石を3列巡らせるのに対し、III、IV区では墳形を整えることを主にした1列が配されている。以下、石室側から順次、列石1、2、3と呼称する列石1は羨門から巡り、直行軸上において石室中心から石列端部まで3.2mを測る半径を通りシンメトリーに配置されるのに対し、主軸上の奥壁側では石室中心からの径は横軸上よりも短くなり2.4mを測る。III、IV区の列石1は盛土とともに据えられた1段積みが検出さるのに留まるが、I、II区では2~3段に重なる部分も見られ、更に、近接した外側に列石2が配置されている。列石3は前部の壁体に連結し、I、II区の墳端に置かれる。3段以上積まれ、最下に大きな石材を多用する。

(3) 埋葬施設

主軸方向をN-51°-Wにとる北西方向に開口した複室の両袖横穴式石室を内部主体とする。
玄室(後室)

奥幅158cm、前幅215cm、右側壁長306cm、左側壁長285cmを測る前面に広がった梯形状のプランを呈す。基底面(地山)から天井石まで230cmを測り、敷石上からは210cm内外であったと思われる。石室掘り方は上記の通り、谷側のI、II区では盛土整地を行い、その後掘削され、玄室基底面(地山)で検出された腰石を固定する溝は丘陵側の右側壁では浅く、不明瞭であるのに對し、左側壁では深く掘られている。

奥壁は敷石上からの高さ105cmの方形を呈した石材を腰石とし、上部に従い、幅を減じた転石を3段積む。右側壁は腰石2石を配し、その上部に目路が比較的通った3段を積み上げ、更に小石を充填し、天井石を架構する。左側壁は高さが異なり、上面が凸状の腰石を据え、2段目に転石を充填し、目路を通す。前壁は稜線が直線的に通り、平滑な面を為して割られた切石を思わせる両袖石を据え、その上部に1、2段積み冠石を架構する。冠石上には玄室側に更に突出した横長の石材1と補填した小石を乗せ天井石を架ける。四壁は腰石上からほぼ同じ角度で持ち送られ天井石1枚が乗せられている。床面には当初、奥壁寄りに敷石が集められ荒らされていた。図示した敷石は最下部のものであるが、原位置をほとんど保たない。玄門に第2仕切石が前室側に押し倒されていた。形状より、前室側の面を上面にして袖石中位の根固石と思われる小石上に配されていたものであろう。その場合、主軸線上で奥壁から300cm内外を測る位置になる。

前室

基底面(地山)から天井石まで155cmを測るが、後室とはほぼ同じレベルと考えられる整地された床面からは140cmの高さである。後室との比高差は85cmとなる。左側壁には袖石や羨道部から引いた位置に壁線が湾曲した腰石1を配置する。対して、左側壁では袖石から羨道部までの壁線がほぼ直線である。腰石上は羨道部を含め、天井近くで高さを揃えた目路が通るのみである。第1仕切石は閉塞石下における最も前室寄りに3石で構成されている。第1、2仕切石間は主軸上で140cmを測る。

羨道部

左側壁で第1仕切石が嵌まる腰石1石を置いた位置まで天井石が架構され、隣接した前面側の腰石端まで閉塞石が置かれていた。羨道部を前者玄室奥壁から主軸上で560cmを測る。それより前面(前庭部)にかけては大きく開いた配石がみられ外護列石に連結する。床面には基底面(地山)上に20cm程の厚さで整地層が敷かれる。

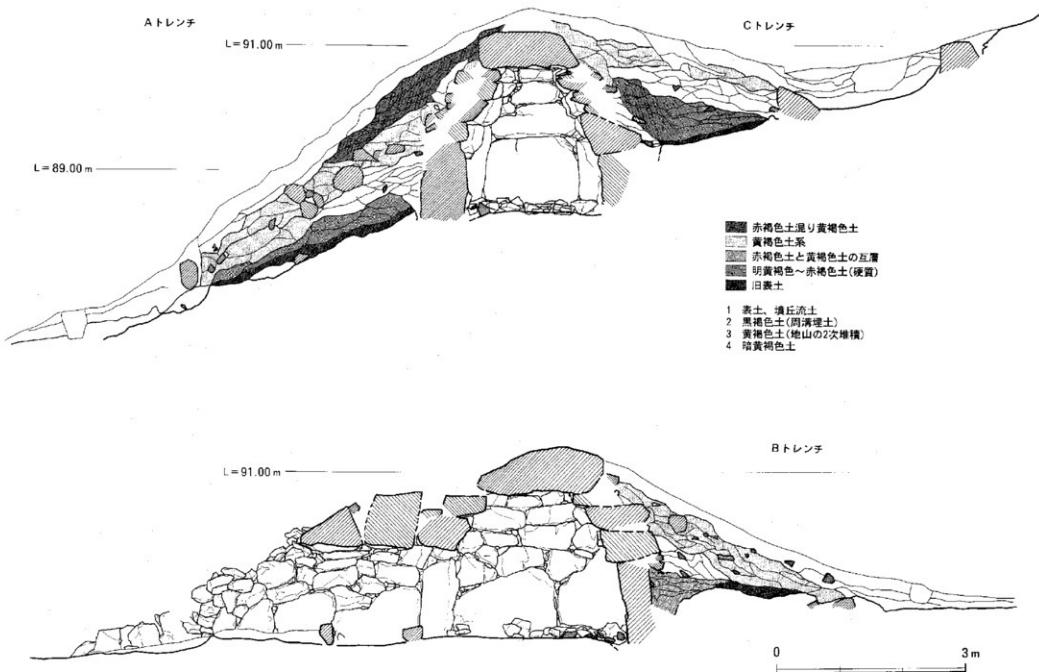


Fig.13 2号墳墳丘土層断面図 (1/60)

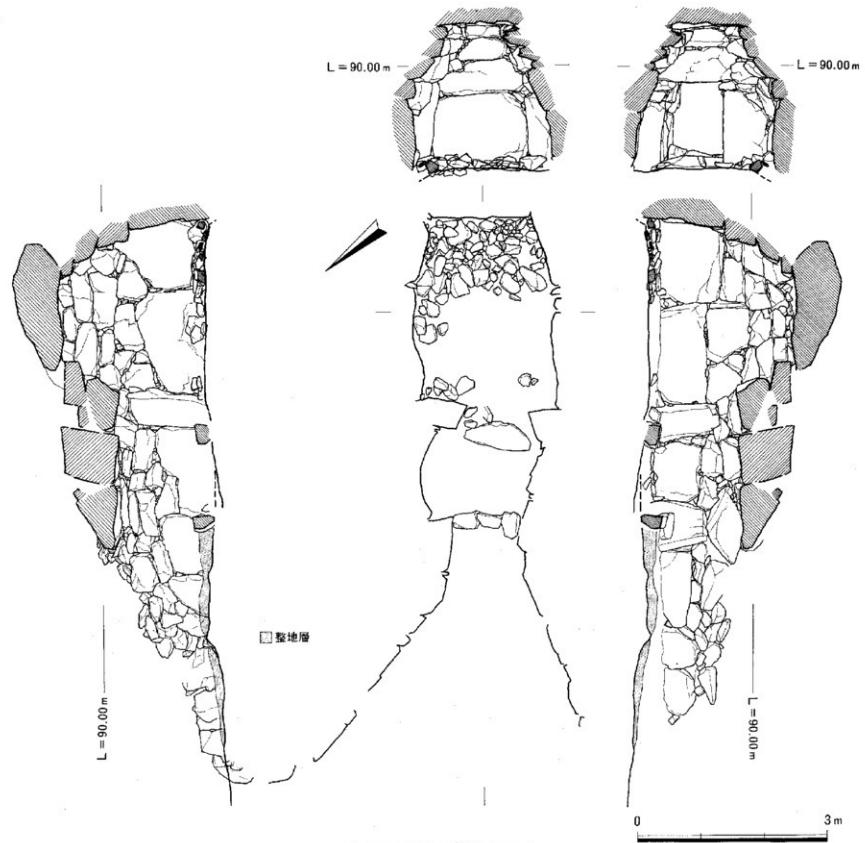


Fig.14 2号墳石室実測図 (1/60)

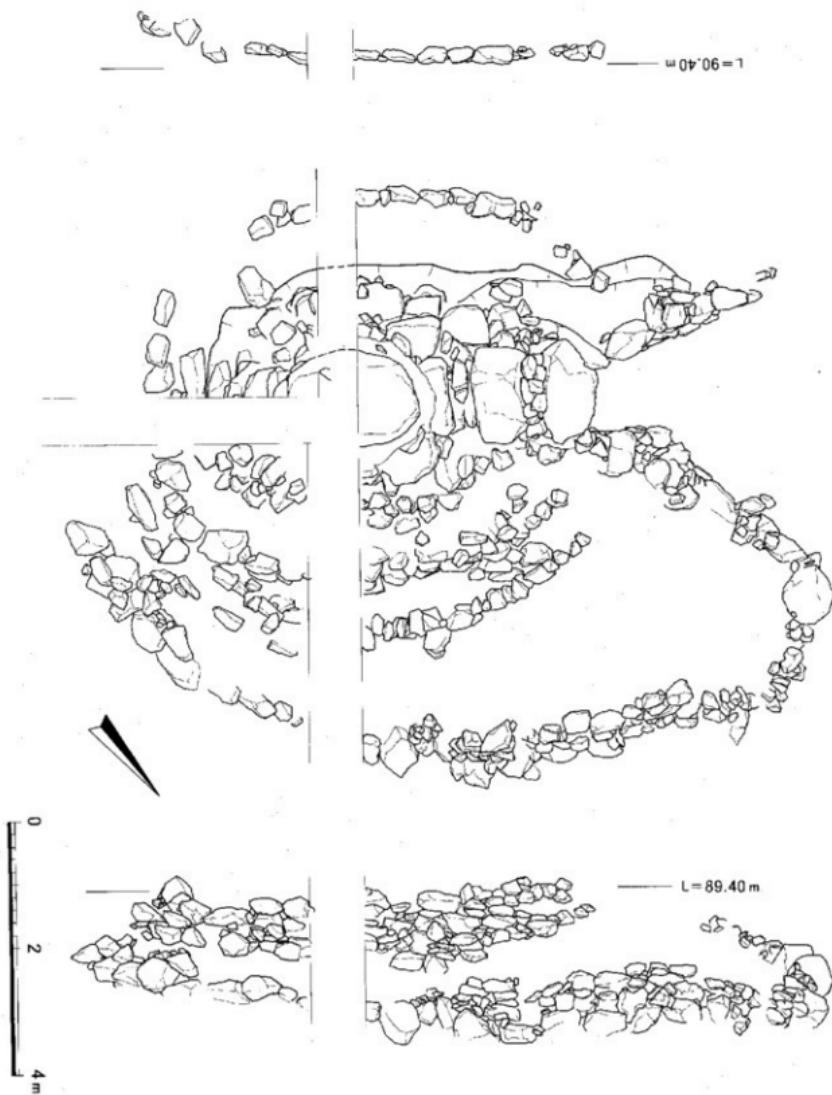


Fig.15 2号墳外護石実測図(1/80)

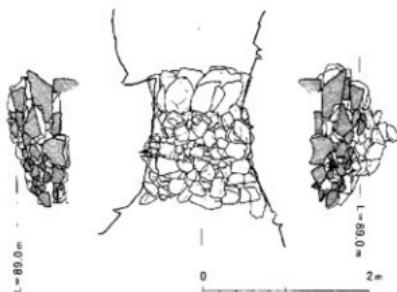


Fig. 16 2号墳閉塞石実測図(1/60)

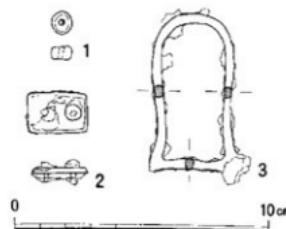


Fig. 17 2号墳出土玉類、鉄器実測図(1/2)

閉塞施設

仕切石上とその背後(前面側)に2、30cmの大振りの石を整然と積み揃え、その上部に小砾を前面へ傾斜させて積む。閉塞石より前面には壁体や閉塞石の崩落した石材がみられたが、その中、長さ140cmの狭長の石材は羨門上の天井石の可能性もある。前庭部の崩落した石材と流出した盛土を除去した下層の黒色土中からは須恵器甕片を中心とした遺物が出土した。

(4) 出土遺物

鉄器

1、2ともに仕切石近くの閉塞石中から出土した。1の鉢具は断面円形にちかい。2の留金具は金銅張りである。鉢は円形の偏平な笠状の頭部を付する。

土器

51が1区列石中から出土した他は前庭部から出土した。33は口径14cmを測り、体部の1/3弱に回転ヘラケズリが施される。36は口径13.5cmを測り、外底はアバタ状の未調整になっている。40は坏部下位に7条、脚部に5条の沈線を巡らす。41~44は類似した器形の高坏である。46は坏部と脚部の接合に補填した粘土はほとんど無い。49は灰白色を呈した軟質の脚部である。47の坏部は体部と底部の境に1条、底部に細縞を2条巡らす。48は砂質の胎土で、脆弱な焼成である。54は頸部に2条の沈線を巡らし、胴部中位に文様帶を構成し、櫛齒列点文を配す。55は54の脚部と思われる。56も脚部に櫛齒列点文が施される。57は外面に本目直行の平行タタキを施すのに対し、58は本目がみられない。60、61は同一個体と思われる。62は頸部に波状文が施され、球形に近い体部をなす。頸部と体部の接合には粘土の補填が無く体部の上に口縁部を乗せ、そこから剥落している。65は口径44cm、胴部最大径74cm、器高91cmを測る大甕である。頸部には沈線によって文様帶をつくり、単線の波状文を施す。

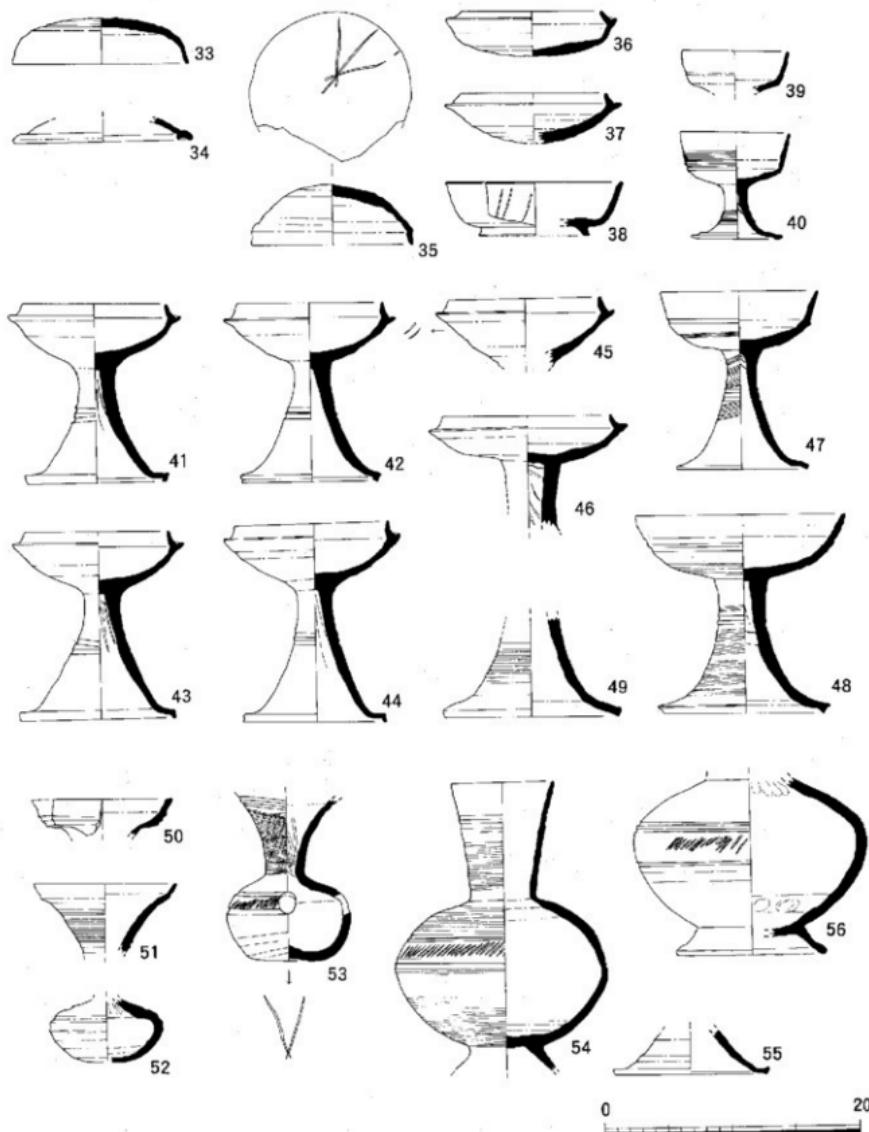


Fig.18 2号墳出土遺物実測図1 (1/4)

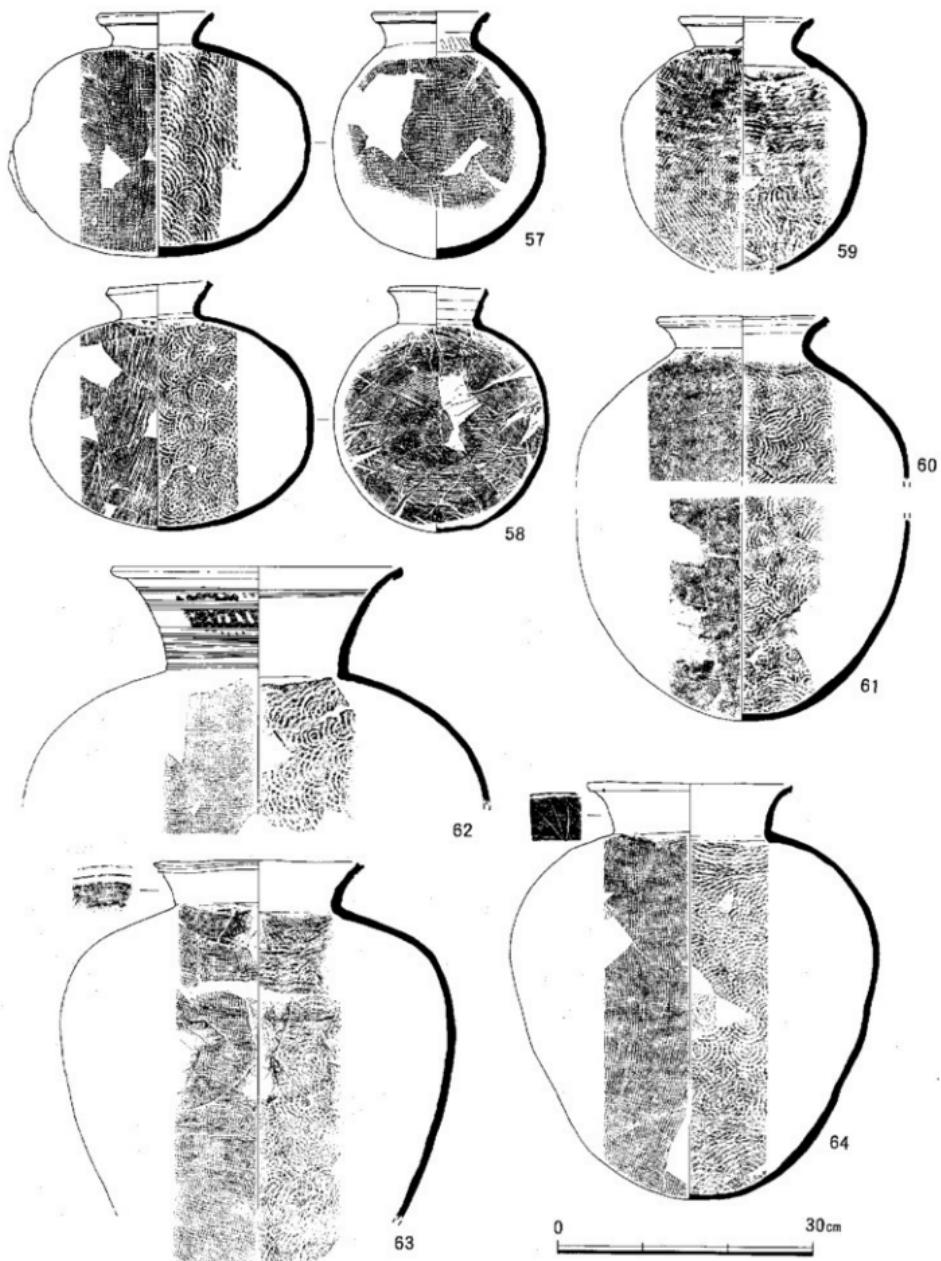


Fig.19 2号墳出土遺物実測図2 (1/6)

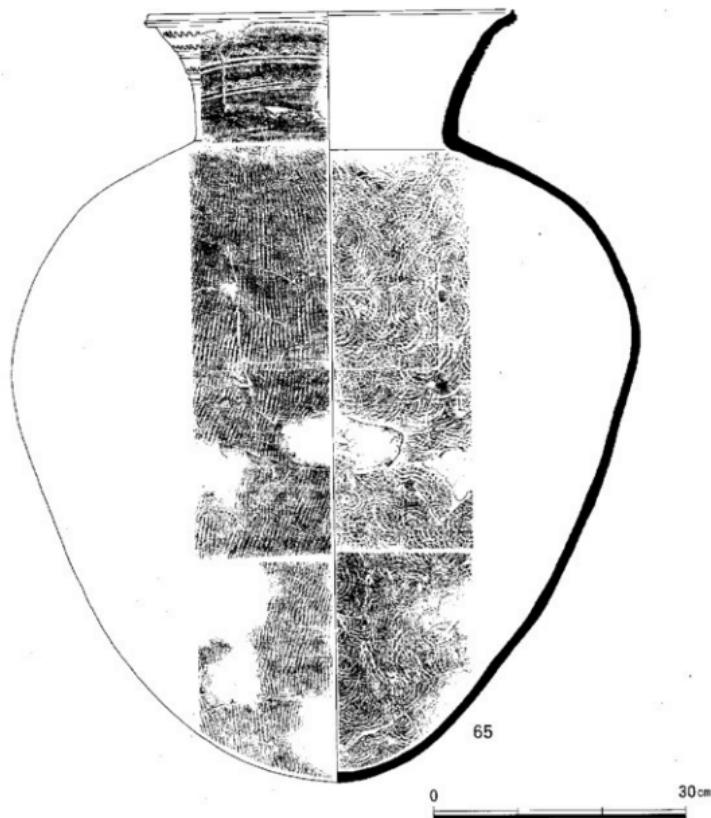


Fig.20 2号墳出土遺物実測図3(1/6)

鉄滓

玄室内埋土中からガラス質滓1点、精練鉄滓5点、鉄塊系遺物が出土した。いずれも長さ4cm以下の小振りのものである。前庭部からは精練滓39点、鉄塊系遺物17点、含鉄滓3点が出土した。最大のもので長さが6cmの小振りのものである

3号墳

(1) 位置と現状

本調査の4基中、最も高所の斜面に位置する。西側は造成工事によって調査範囲が限られ、地山成形による周溝掘方は調査区外に及ぶ。丘陵斜面は急傾斜を呈し、西側周溝内は造成工事による土砂で埋まっていた。石室は天井石が露呈し、玄室の奥壁側天井石が除かれていた。羨門の天井石は落下していた。

(2) 墳丘

地山成形

丘陵側のI、II区に馬蹄形状の周溝を掘り込み、周溝基底面をほぼ平坦に成形し、更に石室側に掘り込んで、墳丘基底面を整地する。従って、形状は周溝基底面をテラスにした2段掘りに見える。馬蹄形状の周溝上端は図示したラインに変換点が認められるものの、掘方は更に西側の広範囲に及ぶものと思われる。しかし、上記の通り調査区が限られ、未検出となった。

盛土

盛土はAトレンチの観察では石室の腰石設置後、掘方内に赤褐色と黄褐色の細かい互層で充填し、その上部に周溝基底面のレベルまで黄褐色土を主とした盛土を行う。次に赤褐色土で石室近くを積み上げた後、墳端側の背後を下部は黄褐色土、上部は赤褐色土を主とした盛土に使い分け積んでいく。対するCトレンチでは概ね旧表土の広がる域までの最下部に赤褐色土を積み、順次、上に硬質の黄褐色土、黄褐色土、赤褐色土を主とした盛土を重ねる。BトレンチもCトレンチ同様の盛土がみられる。

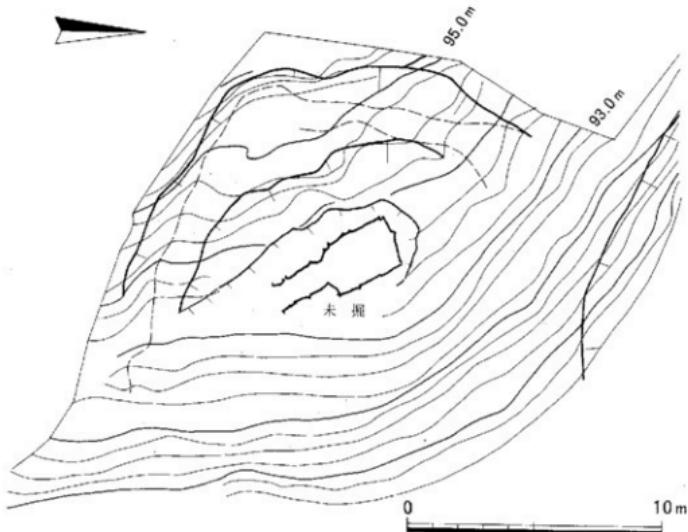


Fig.21 3号墳地山成形図(1/200)

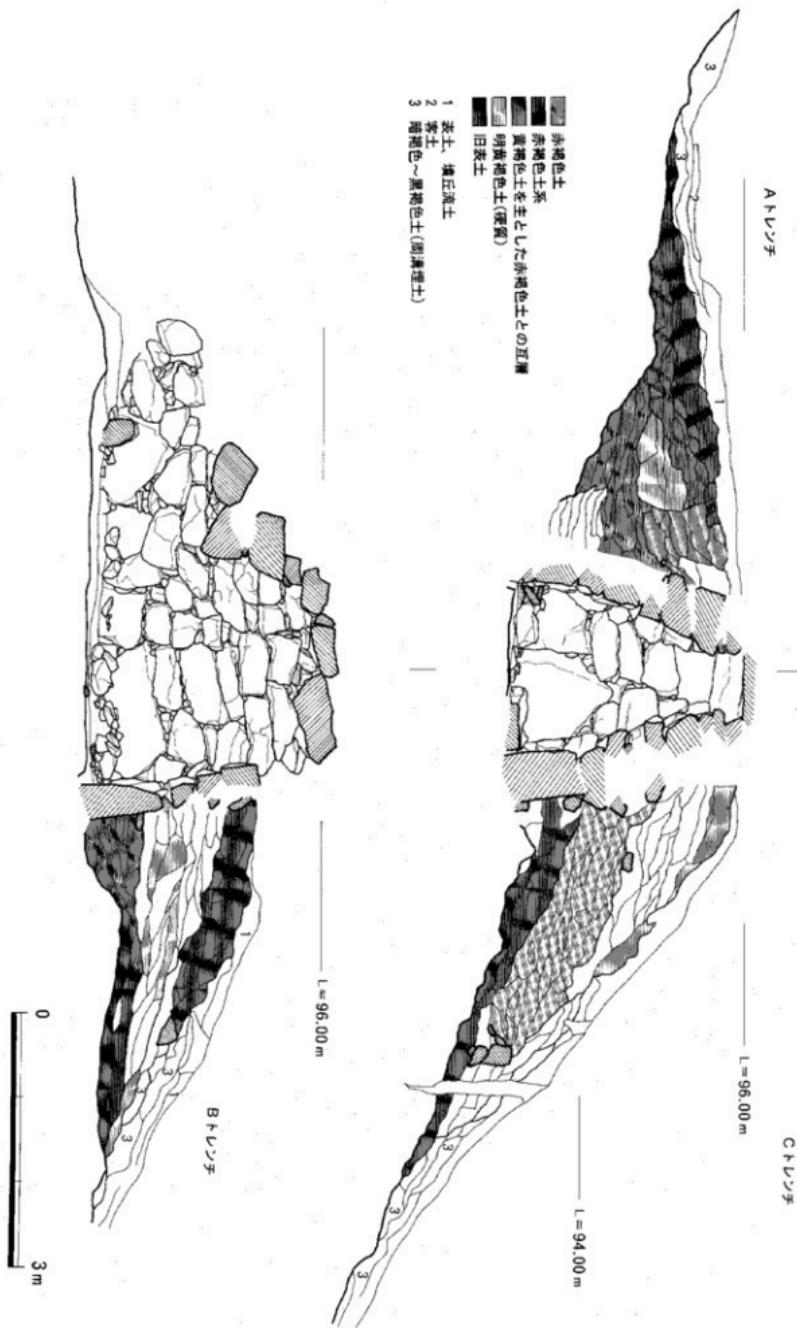


Fig. 22 3号堤填土層断面図 (1/50)

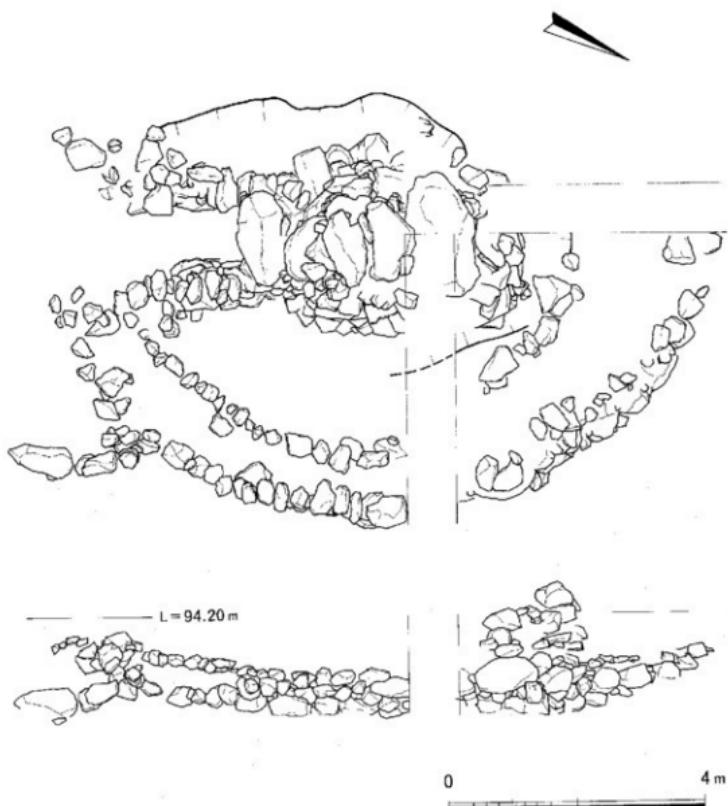


Fig.23 3号墳外護列実測図(1/80)

外護列石

谷側のⅢ、Ⅳ区に2重の外護列石が検出された。墳端を巡る列石1は崩落が著しいが一部に3段の積石が遺存する。列石1の背後(東側)は縛まりが比較的緩い明黄褐色土が見られ、盛土が流出したものも含まれると考えられるが列石を背後から保持するものと思われる。更に谷側にかけて黒褐色腐植土が墳端に沿って堆積している。Ⅳ区の列石1は墳端の周縁を巡り、羨道部に連結するものと上らずに周縁から離れ直線的に延長した短い列石が検出された。前者が乱れているため後者は崩落したものとも見られたが、周辺に崩落による腐植土は無く、4号墳にも同様の列石が検出されているため、意図された配石の可能性がある。

内側の列石2はⅢ区の一部に大振りの石材を用いた2段の積み石がみられるが、Ⅳ区では小振りの石材1段で墳形を整え羨道部に連結している。

(3) 埋葬施設

主軸方位をS-27°-Eにとる南東方向に開口した単室両袖の横穴式石室を構築している。

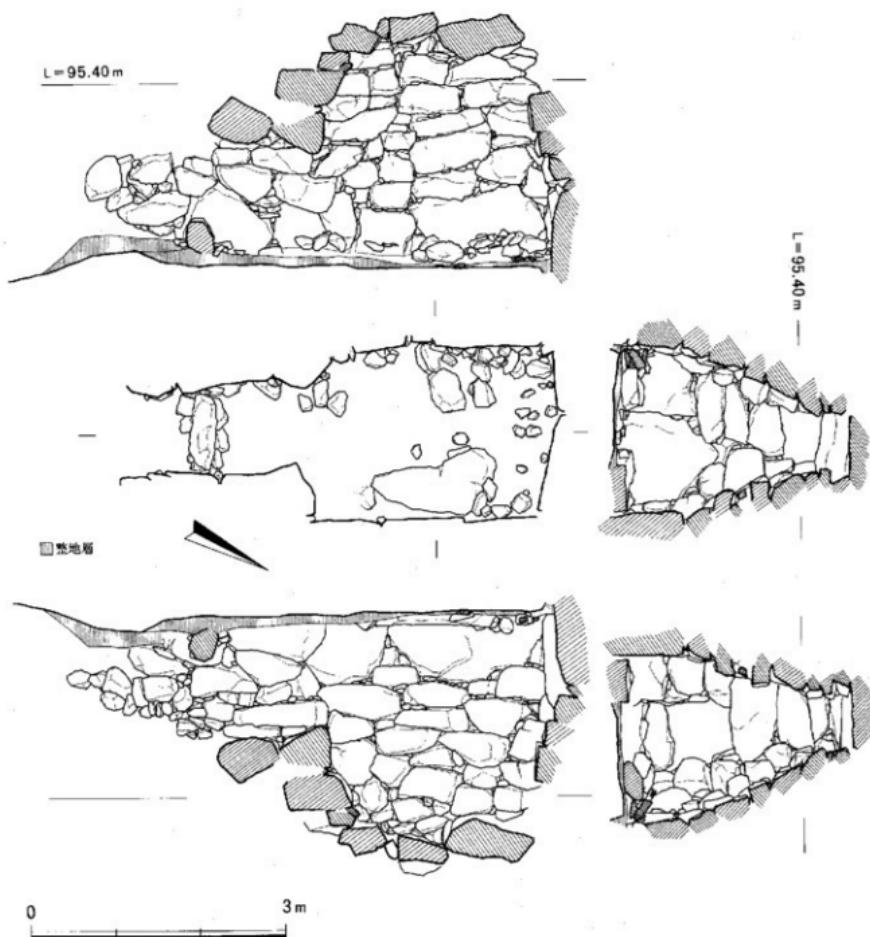


Fig.24 3号墳石室実測図 (1/60)

玄室

奥幅199cm、前幅186cm、右側壁260cm、左側壁257cmを測る長方形プランを呈す。中央の天井までの高さは275cmを測る。奥壁は腰石2石を据え、上部に4段(4段目は欠損)の積石を構築する。右隅角の壁面は、上部が尖る奥壁腰石上に右側壁に架け渡した積石で持ち送る。側壁は土圧のため左側壁が大きく倒れ掛かる。両側壁ともに目路はあまり通らない。左側壁では前面側に比較的小振りの石材を用いて穹窿形に持ち送る。袖部は左袖部腰石の内側への張り出しが小さい

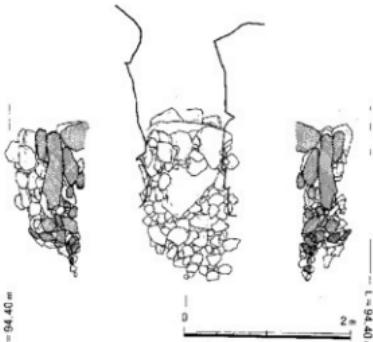


Fig25 3号墳閉塞実測図(1/60)

め片袖に近い形状を呈す。2段目は大きく迫り出し、3段目は隅角に位置し側壁に架るものと、羨道部側壁に架る2石を積み、その間に冠石を積む。右袖部は左袖部より大振りの石材を用い、3段目の横長の石材は羨道部まで架る。前壁は冠石上に同等大の石材と小振りの石材の3段で構築されている。

床面は奥壁側を主に敷石が散在し、遺物とともに荒らされていた。掘り下げられた床面上に右側壁に沿って平坦な石材が検出された。形状、位置から屍床に配されたものと思われる。

羨道部

羨道部は前面の大井石(長さ80cm)が崩落していたが、復元すると右側壁で230cm、左側壁で240cmを測る。両側壁とも前面の腰石は掘り方から浮いて配され、更に前面(前庭部)にかけて貼り石状の配石が設けられている。幅は90cm、高さ130cmを測り玄室(前壁)との比高差は125cmを有し、玄室の約半分の高さに構築されている。床面には敷石は無く、根固めされた第1仕切石が検出された。

床面の掘り方は羨道部前面から一段深く掘り下げ、約20cmの厚さで整地を施す。

閉塞施設

第1仕切石の前面に閉塞石を積み上げる。下部の仕切石上に幅が羨道部とはほぼ同大、長さが90cmの偏平な石材がほぼ水平に置かれていた。扉状に立てかけられていた可能性がある。更に前面には拳大の小石が積み上げられ、中に鉄滓を含む。

(4) 出土遺物

玉類

1、2ともに玄室埋土から出土したガラス小玉である。スカイブルーに発色している。

鉄器

4、7が¹閉塞石中から出土した他は玄室内埋土からである。3の紋具は基部に巻いた刺金が付く。4の留具は周縁を斜めに折り、4本の紙を穿つ。1本の頭部は折れ曲がった形状をなす。5、6の衝は各横幅2.3cm、1.7cmの小形の環が組み合う。7、8の側縁は裾広がるのに対し、9、10は平行する。断面は薄く、7の2個所に孔がみられる。11は紋具の一部、12は形状不明である。13、14は刀子、15の鐵身は大半を欠損し、断面は鋸の為不確実である。16も鐵ないし堅の形状を呈す。

土器

玄室内の埋土から73、74、82、93、96、134、135が出土した他は、墓道から1区周溝にかけて大半が出土した。墓道の最下部には76、79、90、106、115、116、121、125、129、133の時期的に新しいものまで含む。

壺蓋は7類に概ね分類できる。I類(66~68)は口径13.5~14.0cmを測り、器高が低い。67の口縁端部は面をなす。II類(69~74)は口径14~15cmを測り、器高がI類に比べ高く、天井部が丸みをもつ。70は高壺の蓋と思われ、天井部にカキメを施し、口縁端部に段を有す。III類(75~78)は口径13cm前後、天井部は一段と丸みをもつ。IV類(79~82)は口径12~12.5cmに縮小し、天井部が丸い79、80と平坦な81、82がある。V類(83、84)は返りを有し、宝珠つまみを付す

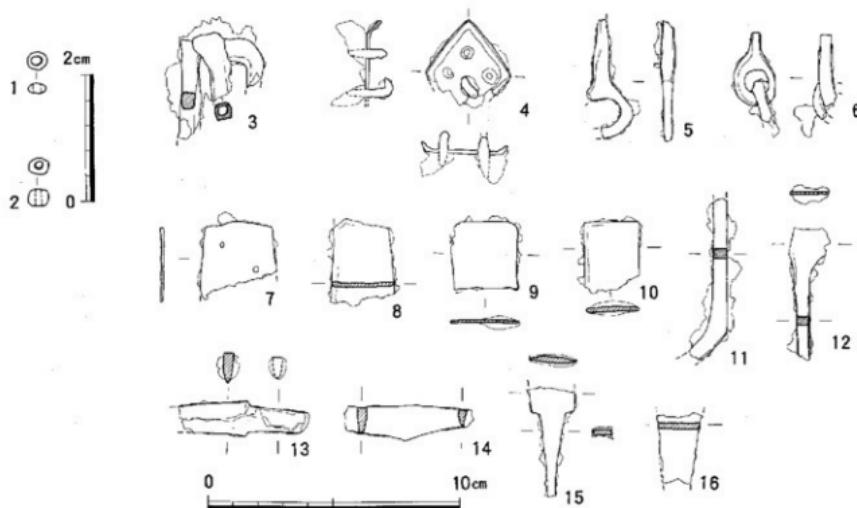


Fig. 26 3号墳出土玉類、鉄器実測図 (1/1, 1/2)

ものである。VI類(85, 86)は器高がさらに低くなり、返りも短い。VII類は偏平なつまみを付し、退化した嘴状の口縁端部をなす。坏身は5類に分類できる。I類(88~96)は口径15cm前後を測る。90は内面にヘラ記号を有し、弧状の当具の痕跡を残す。II類(97~104)は口径14cmをきる位に縮小し、返りも短い。97の外底部にカキメが施され、内底部に弧状の当具の痕跡を付す。99、101、102は底部が突出し、102の外面体部に平行タタキの痕跡を残す。III類(105)は口径10.3cmを測り、底部は器厚である。IV類(106)は口径14.1cm、体部に3条の横線が施される。V類(107)は高台を有す。無蓋高坏108、109は坏部に櫛齒列点文を施し、脚部に3方2段透かしを穿つ。110は坏部に4条の沈線を施し、脚部のほぼ全面にカキメがみられる。有蓋高坏111、112、113は脚部中位の2条沈線を境に上位にカキメ、下位に3方に矢羽状の透かしを穿つ。114の2段透かしは上位に方形、下位に矢羽状の異なった透かしが彫り切られる。116は脚付、鉢117は2方2段透かしを有す。胎土は砂粒が少なく精良である。118は体部中位に沈線2条を巡らせ、平坦になった狭い範囲の底部に回転ヘラケズリの痕跡を残す。123の肩部に刻まれた鋸齒文は一部のみ施され、ヘラ記号状になっている。楕形の124は球形をなす体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施される。壺125は異形をなし、頸部には紋り痕を有す。臘127の頭部には鋸齒文が施され、129は底部を除く外而に灰釉がかかる。137の土師器壺の底部2個所に穿孔がみられる。横瓶139は淡赤褐色ないし黄灰色を呈した土師器の焼成である。141の体部上位には灰釉が垂下する。頸部には櫛齒の波状文を巡らす。142の頸部の波状文は単線である。

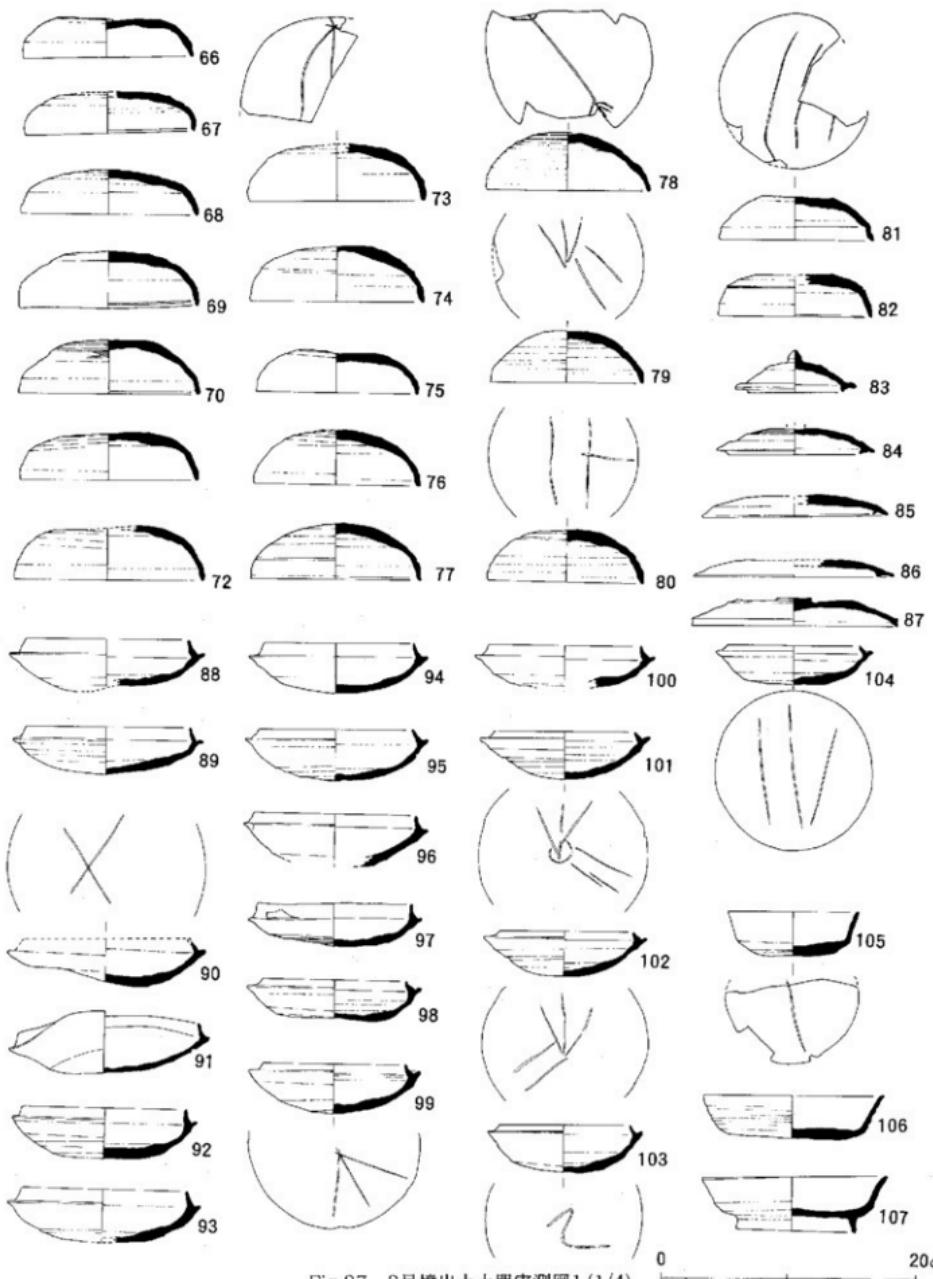


Fig.27 3号墳出土土器実測図1 (1/4)

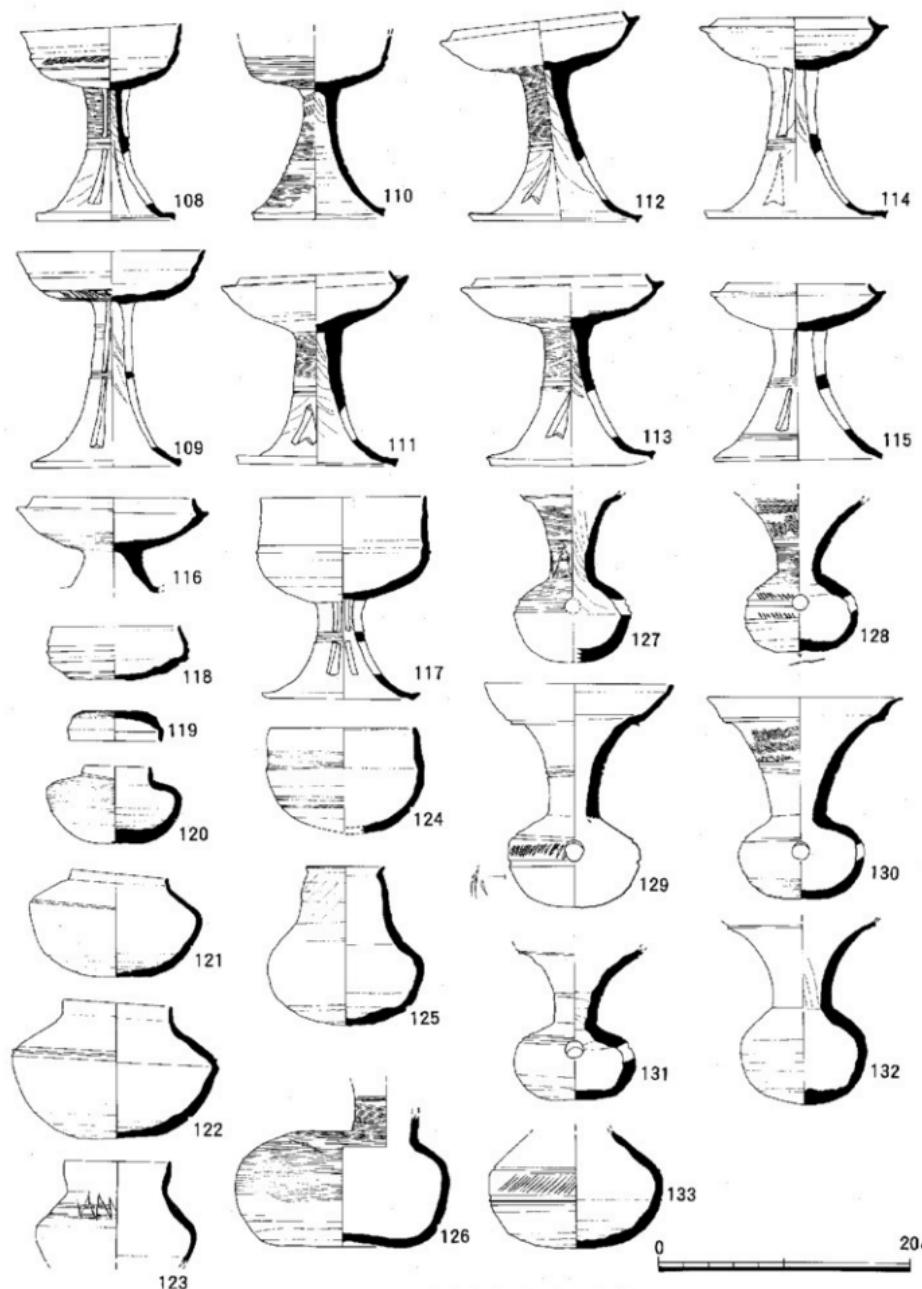


Fig.28 3号填出土土器実測図2 (1/4)

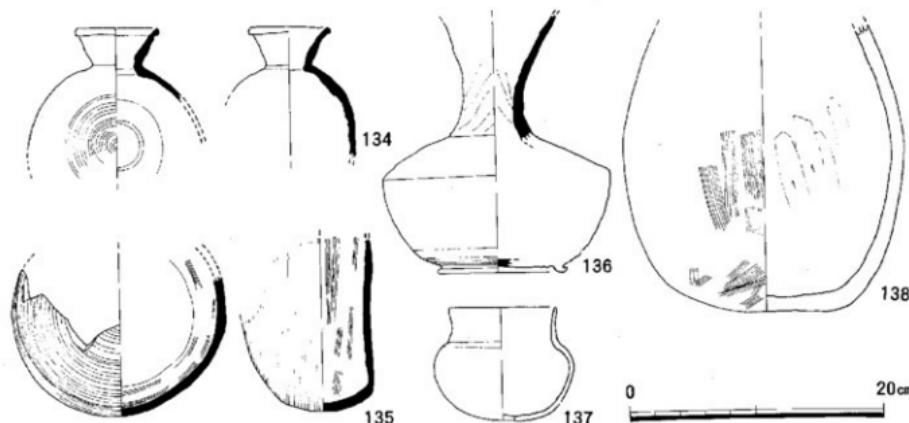


Fig.29 3号墳出土土器実測図3 (1/4)

鉄滓

墓道から大半が出土した。特に、羨門から墓道が掘り込まれた端部に集中する。精練滓は最大のもので7cm、大半は3、4cmの小振りで個体数にして98個、合鐵滓は23個、鉄塊系遺物2個が出土し、この古墳群で唯一鍛冶滓が3個出土し、墓道最下部から楕形滓が3個検出された。

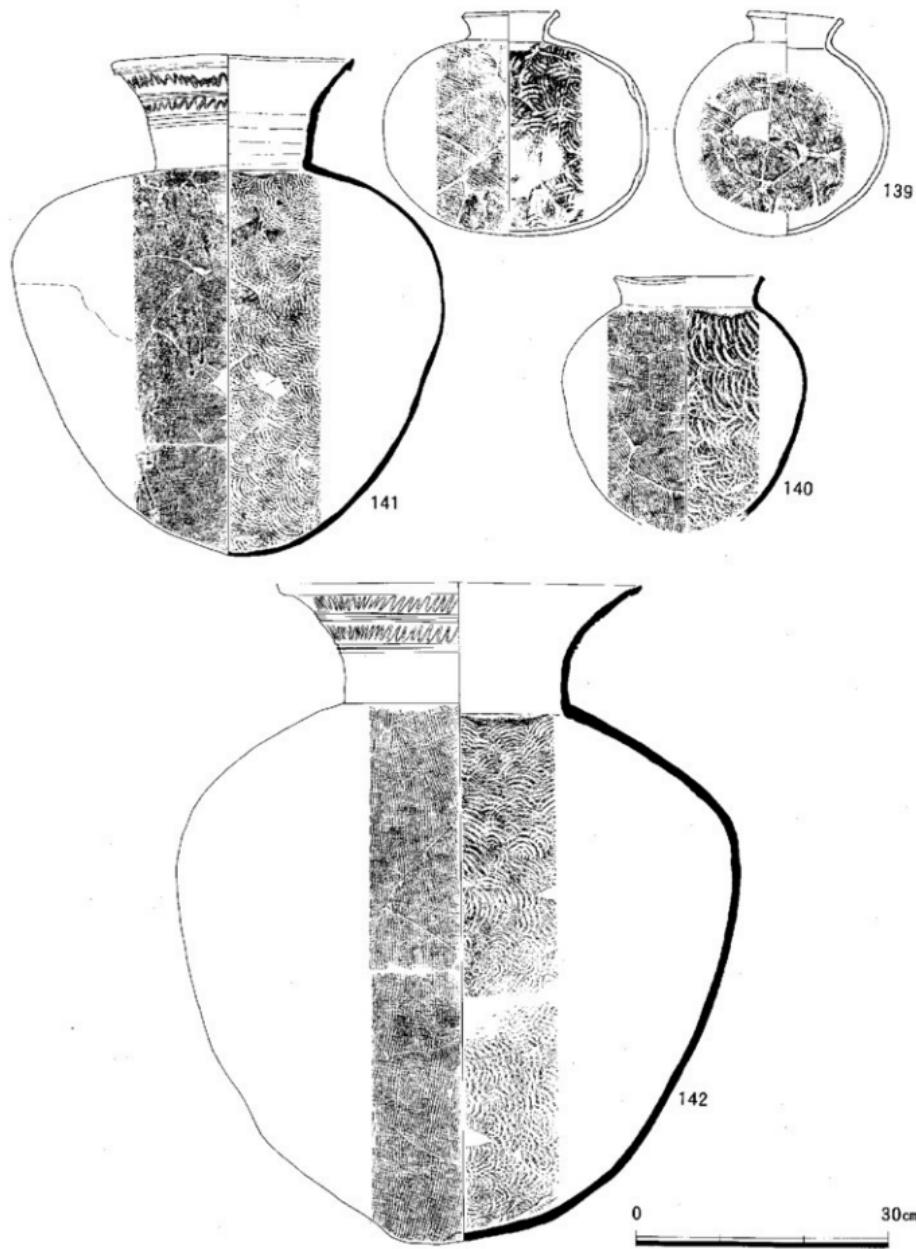


Fig.30 3号填出土器実測図4 (1/6)

4号墳

(1) 位置と現状

当古墳群の最南端に位置する。西側3号墳の立地する急傾斜面に対して、緩やかな斜面に変換した地形上に築造されている。周溝は土砂で埋まり、石室は天井石の一部が崩落する。

(2) 墳丘

地山成形

I、II区では西側の丘陵部に馬蹄形状の周溝を掘削し、その底面から緩やかに東へ下降した墳丘基底面が整地されている。谷側のIII、IV区では石室周辺に旧表土が残され、平坦に整地されるが、Cトレンチでは石室中心から3.4mの位置より墳端にかけて急傾斜の成形がみられる。

墳丘

石室を積み上げながら、石室近くの細かい盛土(1次墳丘盛土)を行い、更に、上部から墳端にかけて墳形を整えた単位の大きい盛土を施す(2次墳丘盛土)。1次墳丘は石室中心から半径3.4mの範囲内に積み上げられる。その盛土は細かく、Bトレンチ、Cトレンチでは下部に明黄褐色の砂質土を用いて硬質に築き、石室と墳丘の保持を図る。最下の旧表土上には赤褐色土を敷き詰め、2号墳と共通した構築手法がみられる。

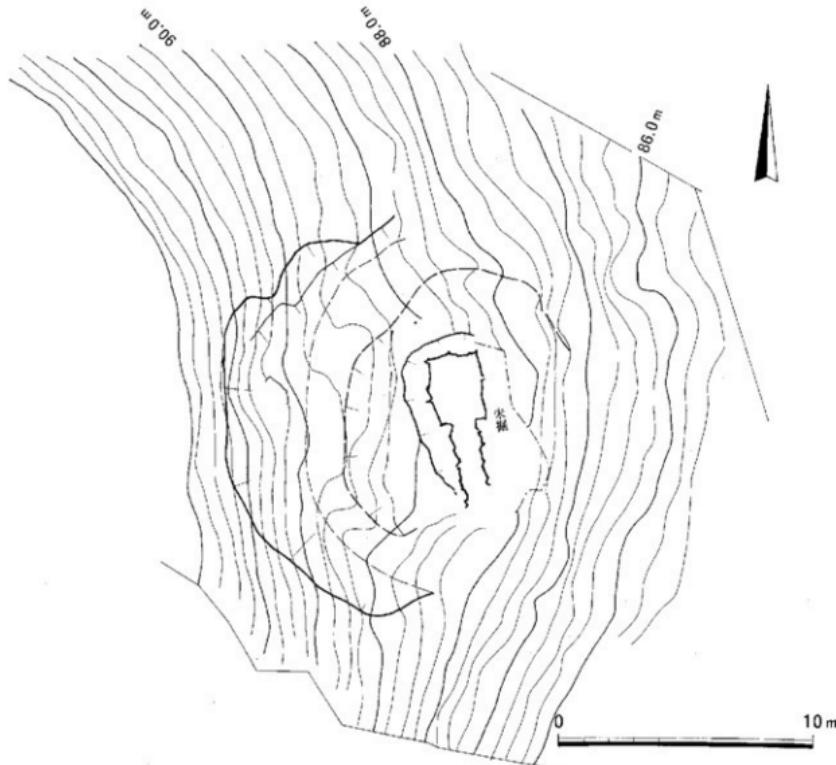


Fig.31 4号墳地山成形図(1/200)

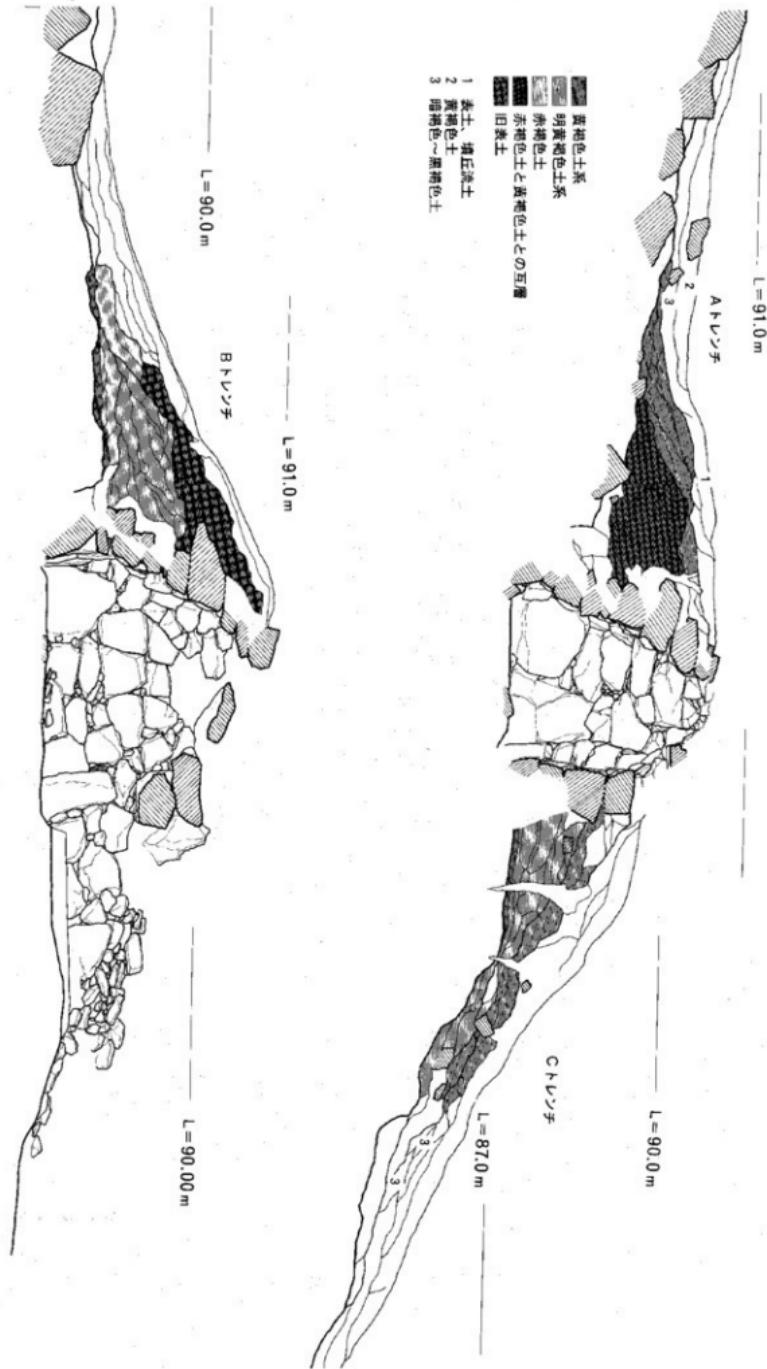


Fig. 32 4号墳墳丘土層断面図(1/60)



Fig.33 4号墳外護石実測図(1/80)

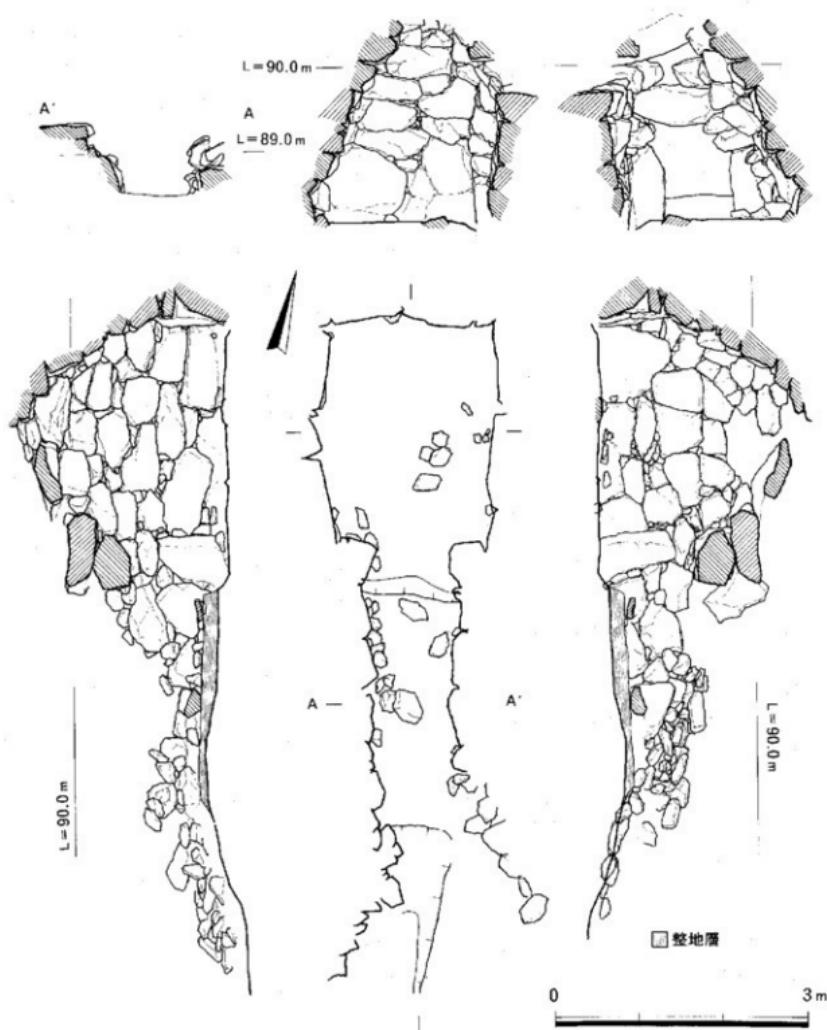


Fig.34 4号墳石室実測図 (1/60)

外護列石

I区では羨道部から前面に開き(列石1)、墳端を巡る列石2に連結するものと羨道部から直に近い配列で、墳丘内の下部に据え置かれたもの(列石3)がある。更に墳丘内部に弧を描いて配されたもの(列石4)がある。列石1は前庭部の壁面を築くように傾斜をもって積まれているが、下方へずれ落ちている。列石2も周溝内へ崩落したものが多いため、元より墳端を画した1段の配列と考えられる。列石3は比較的大きい石材を用い、2段まで積む。IV区ではI区同様の羨道部からハの字に開き、墳端を巡る列石5、6と墳端から離れて前面に延長した列石7が検出された。列石5は木根による搅乱を受け、倒壊している。列石6は羨道部近くの上方では小振りの石材を用いた1段積の墳端を画するのみの配列である。しかし、下方では大振りの石材を用いた3段積みの土留を図った配列を構築する。列石7は列石6の最下とほぼ同レベルで延長し1~2段積まれる。列石6と7に画された基底面上に一部木炭の形状を残した炭や焼土が検出され、列石7は祭祀行為に伴う施設の可能性がある。

(3) 埋葬施設

主軸方位をS-12°-Wにとる南西方向に開口した单室両袖の横穴式石室を構築する。

玄室

奥幅190cm、前幅180cm、右側壁長255cm、左側壁長250cmを測る梯形プランを呈す。天井石は崩落しているが、概ね高さ250cm前後と考えられる。奥壁は高さの異なる2石を腰石とし、両隅角は側壁に架け渡す力石を多用し持ち送る。上部は中央に1石を置き小石を充填し天井石を乗せる。側壁はバランスを崩し、谷側の右側に大きく傾斜している。右側壁は腰石3石を配し、中央から前面にかけて充填し、2~3段目の上面で目路が通る。左側壁の中央から前面にかけては地山中に在る横長の凹凸が著しい巨石上から積石を行う。この地山の転石上に置かれた石材と奥壁側の最下に腰石として用いた横長の大振り石材の他は40cm大の塊石が多用される。袖部は縦長の腰石上に右袖で1石、左袖で2石をのせ冠石を架け渡す。前壁は崩落し、天井石が前面にずれ落ちている。床面は袖部前面から一段下り、小石がわずかに散在するが原位置を留めた敷石は検出されない。石室掘り方は谷側の右側壁底面を深く掘削し、腰石の安定を図っている。

羨道部

幅83cm、長さ340cmを測る。右側壁の前面は崩壊しているが、袖石を除き、小振りな5石が腰石に用いられている。上部は両側壁とともに崩落しているが右側壁には小塊石が積まれている。床面は地山面を緩やかに玄室側へ下り、その上に8~15cmの整地層を敷く。仕切石は検出されなかつたが、袖部腰石の前面の段落ちに配されていたものと思われる。段落ちから羨道部半分程度には左側壁際の小石を含め転石が少量散在していたが、閉塞石の残骸か羨道部壁体の崩落したものか判断はつかない。

前部

羨道部から連結し、前面に開く壁体が構築されている。左側の壁体は上部に開いた傾斜で積まれ、そのまま下方へずれ落ちた状況で検出された。長さは壁線上で2.0mを測り、右側に比べ長い。基底面は羨道部から前面にかけて下降し、左側壁に沿って、幅60~80cmの落ち込みが検出された。黒褐色の埋土が堆積し、掻き出された耳環、玉類を含む多くの遺物が出土した。

(4) 出土遺物

玉類

3がIV区外護列石中、5がCトレンチ表土から出土した他は上記の掻き出した墓道中から出土した。

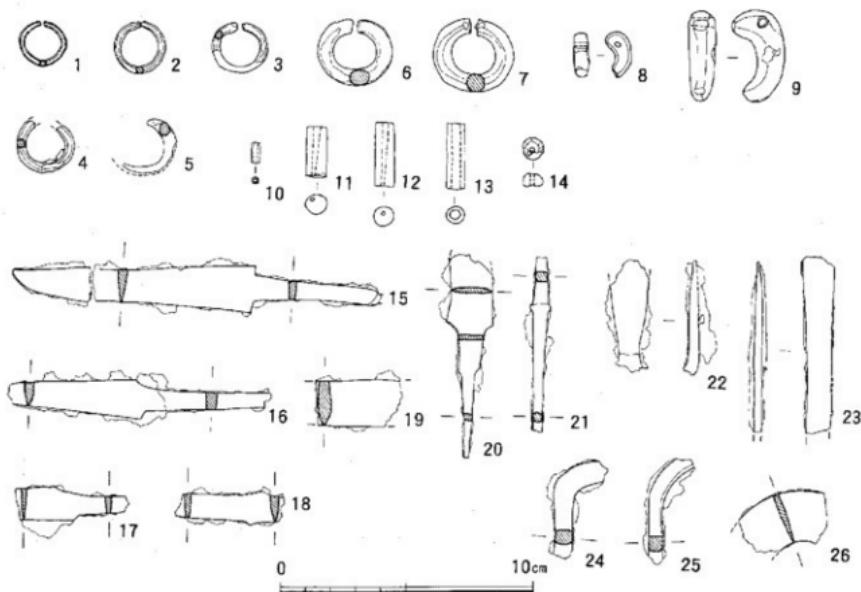


Fig.32 4号墳出土玉類、耳環、鉄器実測図層断面図(1/2)

1は細身で緑銹はふかず、銀製と思われる。2は銅芯金張り、3は銅芯で器面は銀張りと思われる。

4、5は銅芯金張り。6、7は器厚な造りで銅芯銀張りである。8はガラス製の勾玉で、濃紺色に発色している。9は瑪瑙製。10～13は碧玉製管玉である。14の平玉は瑪瑙製。

鉄器

15、16、17、18、21の刀子、鉄鎌類は前庭部(墓道)から出土し、他は玄室内の埋土中からである。15～18は刀子。19は鉄刀片。20、21の鉄鎌は20は鋒を欠くが三角形を呈した平根であろう。21の茎には蓑被を有す。22は馬具と思われるが形状不明。22は鑿状の工具である。24、25は綱具、26は鎌の刃部か。

土器

1区の周溝から前庭部にかけて、ずれ落ちた列石混じりあって多くが出土した。土師器143、144はセットになると思われ、明黄褐色を呈した軟質の焼成である。143の口縁端部は屈曲し、やや外反する。144は受部が短く、返りは器厚である。145の外底は回転ヘラケズリで形成する。146は赤褐色を呈し、器面は剥落している。147の坏底部にはカキメを施す。149の脚部外面は縦位にミガキ状のケズリを施し、内面は横位にケズリ回す。

150の新縄焼土器は口径9.5cm、胴部最大径13.8cm、器高12.4cmを測る。頭部に2条の沈線を巡らせ文様帶を画した後、上位に2重の円文をスタンプする。外側の円は上が開く。下位には細いヘラ描きの三角形文を施す。頭部と胴部の境には小さな突帯を巡らせ、以下3条の沈線で画した文様帶に頭部同様の円文、三角形文を施す。高台端部は内側に傾斜した面をなす。外面口縁部から胴部上位にかけて灰釉がかかる。胎土は砂粒を含まない極めて良質の粘土を用いる。

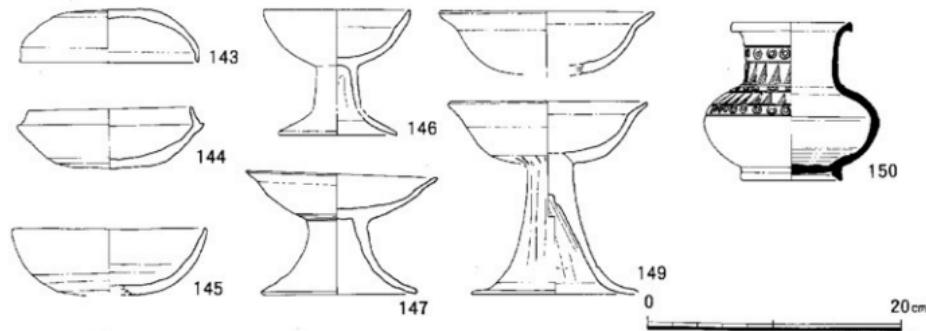


Fig.36 4号墳出土土器実測図1 (1/4)

壺蓋は4類に分類できる。I類(151、152)は151が口径13.8cm、152が15.0cmを測る。II類(153～157)は口径13cm前後を測り、天井部が平坦になってくる。153～155は口縁部をわずかに屈曲させる。III類(158、159)は更に縮小し、天井部が突出した器形を呈す。IV類(160、161)は受部径11cm前後を測り、宝珠つまみを有す。壺身は4類に概ね分けられる。I類(163～170)は受部径14～15cmを測り、返りも比較的長い。167は明黄褐色を呈した土師器の焼成である。外底部に若干のハケメを残す。II類(171～178)は受部径13～14cmに縮小し、返りも短くなる。体部は突出し、底部が平坦に近い。III類(179、180)は受部径11.5～12.0cmを測る。IV類(181)は口径10cm、返りが逆転している。無蓋高壺182、183は壺部の体部中位と底部との境2個所に張り出した屈曲を有し、脚部は3方2段透かしを刻む。184の壺体部は直に近く立ち上がり、脚部には3方に一段の方形の透かしを有す。185、186は壺部に沈線を巡らせ、脚部にかけてカキメを施す。187は小形になり、壺部が丸みをもつ。206は提瓶の体部に壺を付した特異な器形を呈す。体部の凸面にはカキメを巡らし、中央に径6.5cmの円盤の貼り付けがみられる。裏面は平坦にナデあげ、わずかにヘラ状工具による擦痕が残る。壺部はこの面の延長で厚く粘土をして接合する。壺部は口縁端部に回転したヨコナデがみられる他は粗雑なナデ仕上げである。胎上は砂粒を多く含み、焼成、技法とともに他の須恵器と類似する。系譜として古式ではあるが、壺付壺として報告、紹介されているものに結びつくものであろう。210は断面方形の口縁端部が外側に張り出し、体部上位はカキメ、下位はハケメを施した後、ナデ仕上げる。内面は口縁部から体部中位までがヨコナデ、下位はナデによって当具痕が不明瞭になっている。外面褐色、内面灰色を呈した軟質の焼成である。211、212は頸部にハケメを残し、213は波状のヘラ記号を刻む。216は灰釉の垂下が著しい。217の頸部は外反し、内面は細い同心円文が残る。217は3列の文様帶に斜行列点文を互いに逆行させ刻む。218は器面が剥落し明黄灰色を呈し、土師器に近い焼成である。同器形、法量、焼成の別個体が1個出土している。220はカキメ後細い斜行刻みを施す。

鉄滓

2区の周溝内から9cm大の精練滓が1個、2区と3区の境の墳端に12cm大の炉底塊が1個出土した。墓道から3cm以下の小振な精練滓5個、鉄塊系遺物1個が出土した。

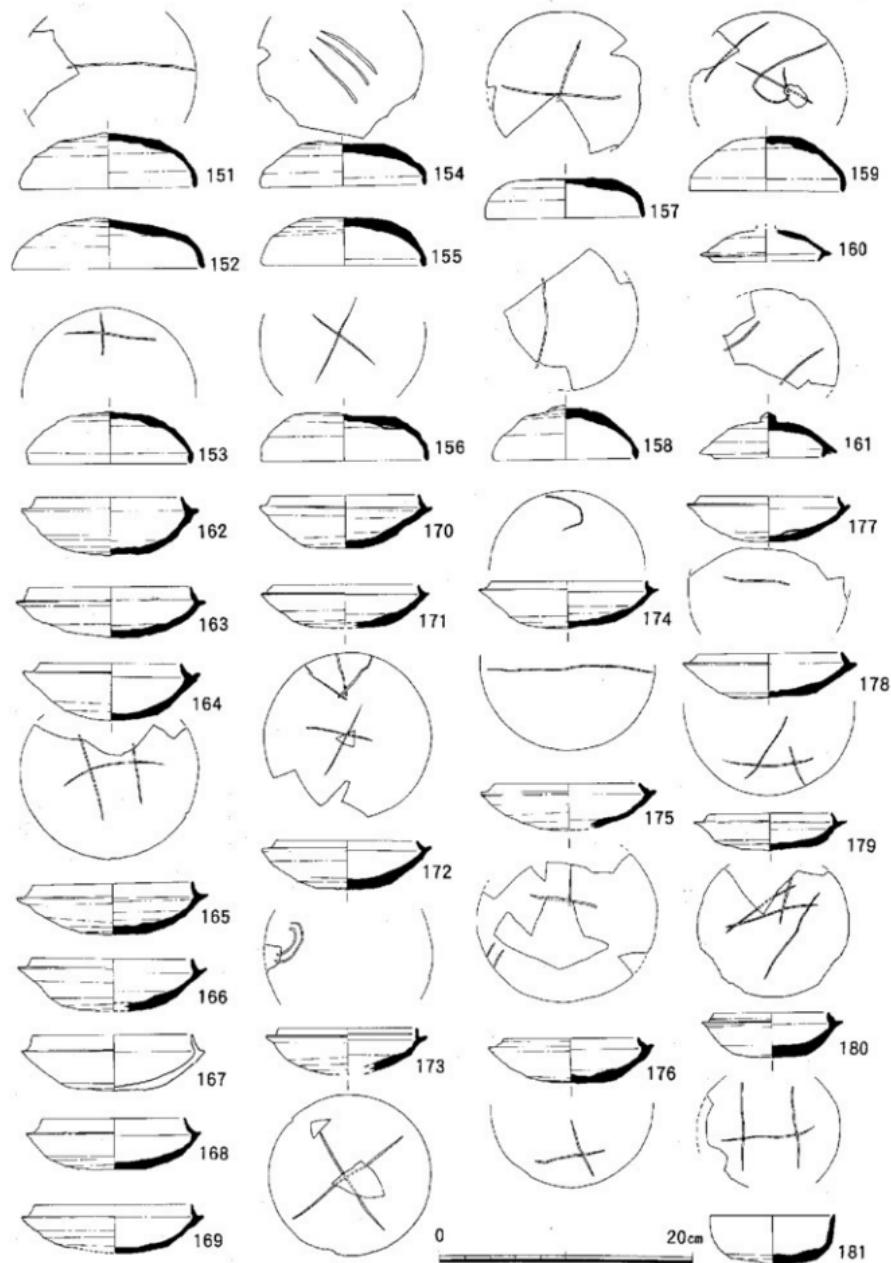


Fig.37 4号墳出土土器実測図2 (1/4)

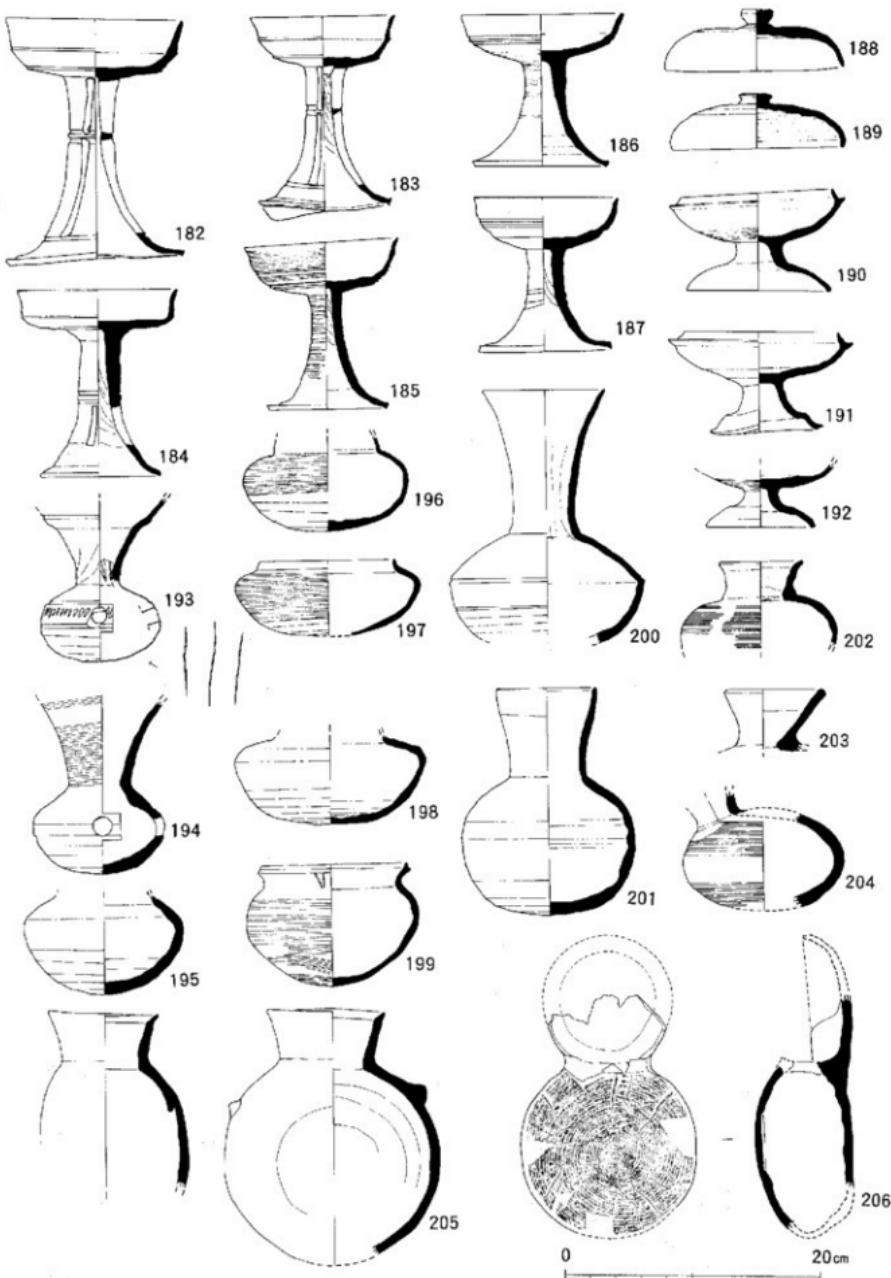


Fig.38 4号墳出土土器実測図3 (1/6)

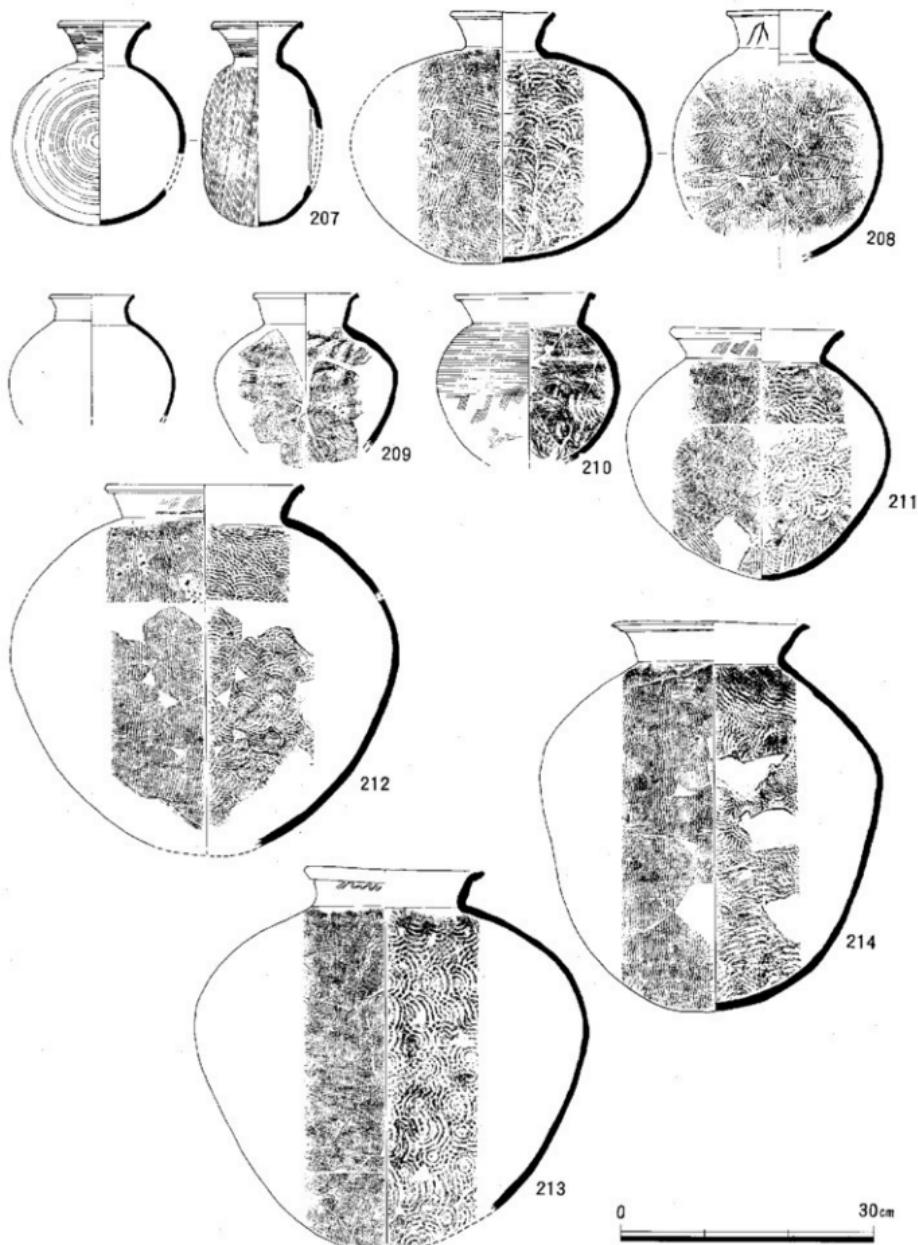
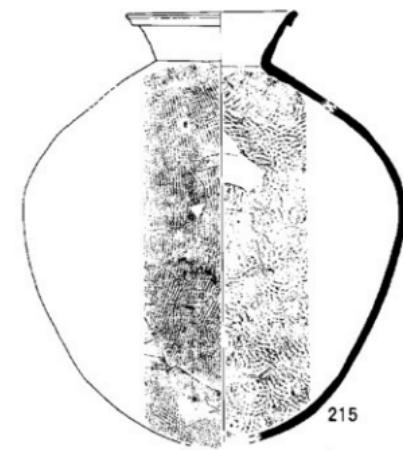
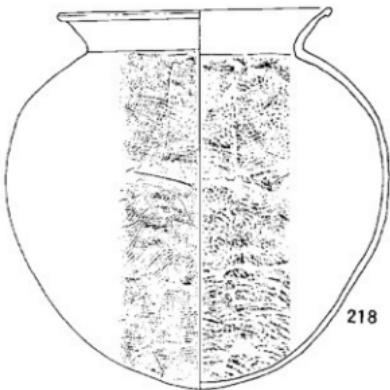


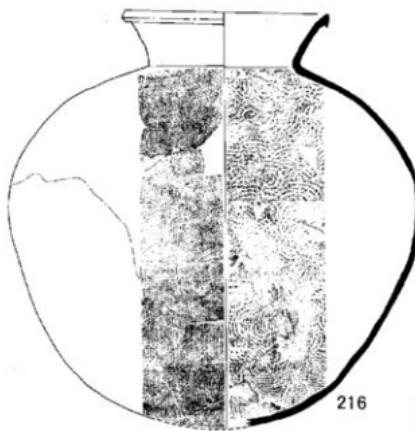
Fig.39 4号墳出土土器実測図4 (1/6)



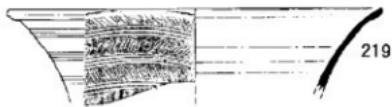
215



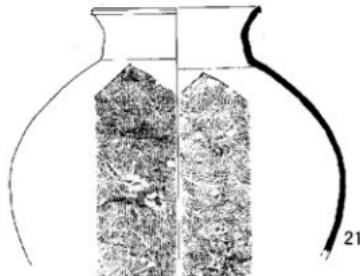
218



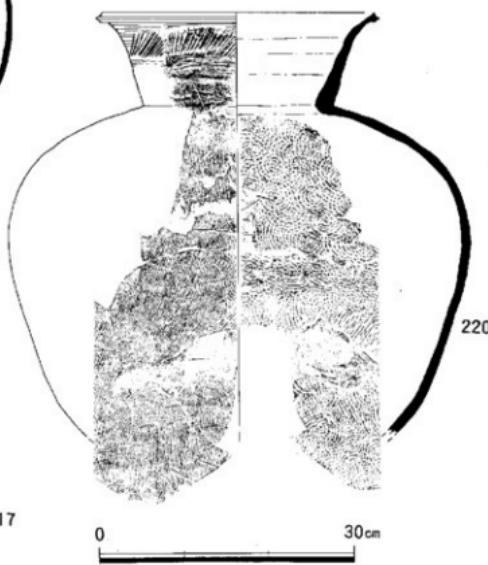
216



219



217



220

0 30cm

Fig.40 4号墳出土土器実測図5 (須恵器 1/6)

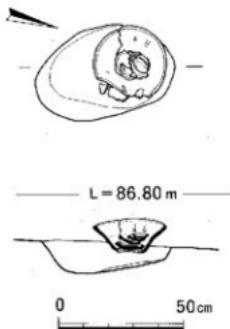


Fig.41 007 (SX) 実測図 (1/20)

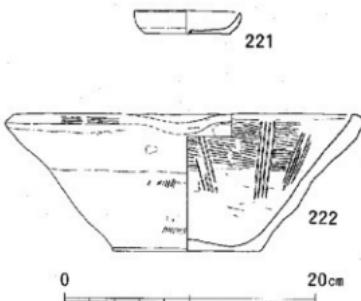


Fig.42 007 (SX) 出土遺物実測図 (1/4)

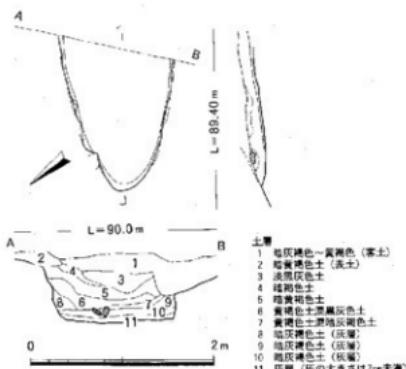


Fig.43 006 (SX) 実測図 (1/40)

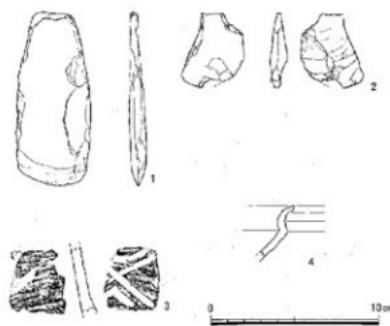


Fig.44 1号墳旧表土出土遺物実測図 (1/3)

007 (SX) 4号墳のCトレーナー際の墳端で検出された。掘り方は極めて不明瞭であったが、土師質の捏鉢の中に土師皿を入れた状態で埋置されたものである。221は口径8.5cmを測り、糸切底である。222は灰色～黄褐色を呈し、5本単位の刷目を施す。

006 (SK) 1号と3号間の調査区間の丘陵斜面から検出された。全形は不明であるが、丘陵側に開いた略三角形を呈すと考えられる。裏面は焼けて硬化している。最下に大きさ2cm未満の炭層が堆積していた。

その他の遺物

1号墳3、4区の旧表土以下より繩文の遺物が出土した。1は磨製石斧は安山岩製、2はサヌカイト製の石匙、3は沈線による文様が施されている。図示は割愛したが、3号墳の表土から弥生中期の甕片が出土した。

IV まとめ

1 古墳築造の時期

各古墳から出土した遺物を牛頭窓を中心とした既往の編年に対比すれば、1号墳がⅣ期～VI期2号墳がⅣ期～Ⅶ期、3号墳がⅢb期～Ⅵ期、4号墳がⅢb期～V期に該当すると考えられ、1、2号と3、4号に時期差が認められる。石室の形態からも1、2号が巨石に近い石材を用い、玄室と羨道部の天井の比高差が小さいのに対し、3、4号墳では玄室の天井部の高さは羨道部の高さの倍に設けられている等明らかに差異が認められる。更に詳細に石室の形態を比較・観察すると、1号墳は一部重箱積みが為され、右羨道部は短く退化している。玄室の天井石は2号墳と同じく大振りの石材1石を構築する。複室の2号墳は巨石群の乙石群の2号墳に近い形態になり、新しい様相がみられる。石室の開口方向は他の3基と異なる。墳丘規模もやや大きく、外護列石を重複し墳丘を保持している。3号墳の袖部は塊石を積み重ね構築した古い様相をもち、当古墳群のなかで最も古い築造と考えられる。出土遺物もⅢb期の古柏を示す杯があり、立地では最も高所に占地している等の状況からも開始時期のものと推察される。4号墳は玄室と同程度の長さの羨道部を有し、前庭部に側壁状の積石を構築している。玄室の形態、構築においては3号墳と近似する。

以上からまとめると3号(古)→4号→1号→2号(新)の順で構築されたものと考えられるが、上述の通り3号と4号、1号と2号は近接した時期の築造と思われ、立地を含め考慮すれば、2つの造墓主体を想定し、3号 → 4号

1号 → 2号 の組み合わせが可能である。

2 墳丘施設について(外護列石を主に)

4基すべての古墳から外護列石が検出された。傾斜方向の谷側を強固に積み土留を行うことを意識されているのは明らかであるが、3号墳と4号墳の4区においては墳端を巡り回るものと、そのまま開口方向と平行して延長する列石に分岐するのが検出された。後者の石材の積み重なりは整然としているため、上からの落とは考え難い。4号墳ではこの分岐した列石間に炭と焼土の分布が検出され、祭祀行為の空間が推察される。なお、4号墳の1区では前庭部の側壁と分岐し、羨道にほぼ直行した列石が検出された。この地域一帯に特有なものか類例を待ちたい。

3 新羅土器について

4号墳の1区周溝から出土した。周辺から出土した土器によってⅢbの新相からⅣ期にかけての時期に供献されたものと考えられる。近くの吉武L群1号、8号墳、三郎丸3号墳から出土し、時期的にも近く集中している。渡来人との関連も考慮する必要がある。また、同じく4号墳から出土した坏付瓶は類例をみず、初期須恵器の古期において坏付壺として紹介されたものが形態的に近い。その系譜は類例を待ちたい。

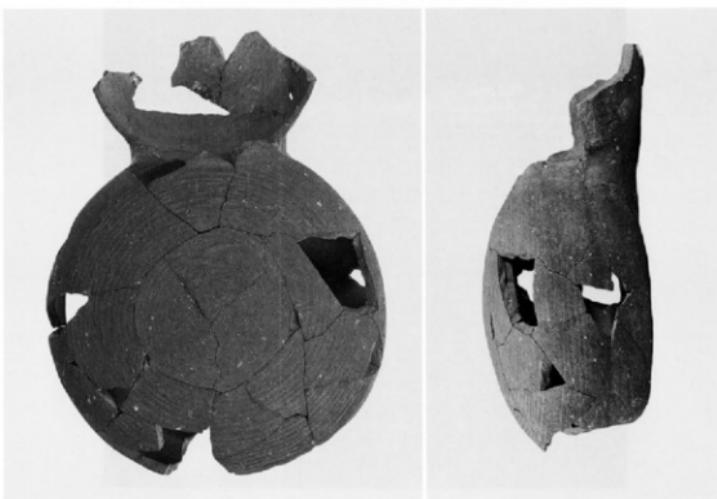
注

- (1)「吉武塚原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980
- (2)「対馬・北部九州発見の新羅土器」小田富士雄「古文化談義」第19集 1988
- (3)「愛媛県玉川町出土の坏付壺と鉢付碗」正岡勝夫「古文化談義」第31集 1993

PLATE



1. 4号填出土新羅土器



2. 4号填出土环付瓶



1. 金武古墳群吉武 G 群調査区全景(南から)



2. 金武古墳群吉武 G 群調査区全景(上から)



1. 1号填墳丘遺存狀況



2. 1号填墳丘除去後石室、外護列石露呈



3. 1号填玄室奥壁



4. 1号填玄室前壁(冠石)



5. 1号填閉塞石



6. 1号填玄室前壁(袖部)



1. 2号墳墳丘遺存状況



4. 2号墳玄室(後室)奥壁



2. 2号墳墳丘除去後石室、外護列石露呈



5. 2号墳玄室(後室)前壁



3. 2号墳閉塞石



6. 2号墳前部遺物出土状況



1. 3号墳墳丘遺存状況



3. 3号墳玄室奥壁



2. 3号墳墳丘除去後石室、外護石露呈



4. 3号墳玄室前壁



5. 3号墳閉塞石、墓道遺物出土状況



6. 3号墳Aトレンチ土層断面



1. 4号墳墳丘遺存状況(南から)



4. 4号墳玄室奥壁



2. 4号墳墳丘遺存状況(東から)



5. 4号墳玄室前壁



3. 4号墳墳丘除去後石室外護列石露呈



6. 4号墳墓道(前庭部)遺物出土状況

金武古墳群

金武古墳群吉武G群の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第579集

1998年（平成10年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 友盟社印刷有限会社
福岡市南区大楠一丁目26番20号

